蛍よ……妖しの海を翔べ

――不死鳥伝説――

高谷　信之　作

人物

影法師　西行	楓
常陸坊海尊	梢
片岡八郎	蝶
武蔵坊弁慶	蛍
伊勢三郎義盛	常盤
しょうもん坊	牛若丸
源頼朝	静
杉目小太郎行信	北条政子
源九郎義経	郷
佐藤三郎継信	袈裟
佐藤四郎忠信	
梶原景時	
土佐坊昌俊	

プロローグ

闇――闇の中に始めに一条の光が差し込む、一つの影法師が出来る。一人の男が立っていた。

影法師　（仮面付けたまま）時・・・・時が流れていく、偽物の街に偽物の風が渡り、人は人と出逢い借り物の愛を語り、たいして憎しみもせず別れる・・・・（手を突き出して）この手の中に時を握れたらと、失われた歴史の中で何億の人々が切望したことだろう――だがかつて誰一人として時間を手に握りしめた者はいない――

時の残酷な仮面の下で、人はなお戦いその顔は歪み、剥がれる事のない絶望という隙間に涙の川は流れるのかもしれない……（仮面を取る）

――せめてこの手の中に時が握れないのなら、自分の死の瞬間だけは、満開の桜の下で――

願わくば花の下にて春死なん、その如月の望月の頃――

私、世を捨てた影法師――

途中から風雨の音激しく入る。険しい山の獣道――夜、二人の男がずぶ濡れで現れる。

常陸坊海尊　今夜中に必ず山越える、いいな。

片岡　・……・

常陸坊　いいか俺達は何も逃げ出したんじゃない、こっちから見切りをつけてやったんだ、そこの所を間違えるなよ……どうした片岡（ト一人の男に）お前追っ手に怯えているのか。・……・とにかく脱けちまったんだ俺達は！確かに四年前、あの男は天に昇る竜だった、だが、今あの男が向かい合っているのは死だ――あいつのかすんでしまった目には死の影しか映っていない、そんな奴に俺達はいつまで付き合うっていうんだ――おい！何だ！？どうした……（片岡の気配に気づく）

雷鳴と稲妻が走る。

常陸坊　おい貴様！貴様が追手だったのか！やろう！（ト刀を抜いて片岡に切りかかる）

取っ組み合いになり、やがて常陸坊が馬乗りになって片岡の上で刀を振りかざす、二人は凍りつく、稲妻が走る。

暗転

第一場

人物　武蔵坊弁慶、楓、伊勢三郎、梢　、しょうもん坊、蝶、杉目小太郎行信、
蛍、源義経、片岡八郎、その他

全てはけだるく虚しい中で始まる。明らかなのは雨音だけか、梅雨の走り雨である。ひとしきり軒や彼方の川面に落ちる雨音、それが不意に止み、軒を打つ雨垂れの音――明かりが入ると舞台は廃墟のような、剥き出しの石の館、例えば、それは焼け残った銭湯のタイルの壁のようであったり、或いは、爆撃を受けてようやく骨組みと石の壁を残した狭い体育館のようでもある。

奥に簡素な寝台があったり、ドラム缶や椅子のようなものがポツン、ポツンとあり、男や女が寝そべったり、腰掛けたり、酒を飲んでいたり――いずれも目はうろん、充分すぎる程退屈しきっている。煙草の煙が充満している。しばしの沈黙の中に充分な倦怠の空気が淀む。衣装その他に関しては全て西洋式である。

武蔵坊弁慶　通り雨か・・・・

楓　泥んこやってくるよ、泥んこが・・・・

伊勢　泥だらけさ、だが一体奴等が泥んこだろうと、こざっぱりしてようと、
俺達に何の関係があるっていうんだ……

楓　　こわい……

しょうもん坊　腹へるんだよ、きまってこういう時――腹へるんだ――（ト蝶という女の食べていたスルメを口からもぎり取って、自分の口へ入れる）

蝶　　ふん、何さ、この大食い――とっととくたばりゃいいんだ。

しょうもん坊　同じだろうが。

蝶　　何？

しょうもん坊　俺が食おうが、お前が食おうが大差ない、どっちだって・・・・

蝶　　違う。

しょうもん坊　どう違う。

蝶　　空きっ腹のままで待ってるのはたまらないよ。

しょうもん坊　埋めてやるよ、腹。

蝶　　どうやって。

しょうもん坊　（薄く笑い）きまってるじゃねえか、こうやって――（ト蝶を抱き寄せ胸に手を入れる）

蝶　　やだよ、やだ・・・・そんなのいや……（ト心細げに小さく叫びながら寄せられた男の唇をむさぼるように吸う）

ややあって、しょうもん坊は唇を放し

しょうもん坊　何がどうなったって、逃げられやしねえんだ俺達は！（ト叫んで蝶

を押し倒す）

蝶　抱いてよ、しっかり、寒い、寒いの……・（ト云いながら激しく、しょうもん坊の腕の中で身をよじる）

先程からじっと一人、奥の高い所で眼下の河の流れを見つめていた男、杉目（スギノメ）小太郎行信が振り向く。

杉目　寒いだと！まだ始まったばかりだ、地獄のような、陸奥の夏が一汗ぬぐって、裏切った抜け出したっていうねばい汗滴らせて、一山越えてさようならか――節操もなければ、度胸もない――

チラとしょうもん坊と蝶は杉目を気にして動き止まるが、すぐまた激しく抱き合っている

杉目　似たようなもんだ、お前達も、尻尾巻いて脱走してった奴等も、どっちもどっちだ――

弁慶　どういう事だ。

杉目　静かに待ってりゃいいんだ――そうすりゃあ

弁慶　おい！（ト杉目に）

杉目　分かった！（ト制して）あんたの言いたい事は分かるよ、だが今日は別だ、今日は言わせてもらうぜ、たっぷりと――いいか、待ってさえいりゃあ、

きちっとお迎えがくらあ、どろんこの馬に乗ったお迎えが――都合よく、

塩梅よく――

伊勢　あんたは慣れてるからな、待つ事に、ところが俺達は待つ事は苦手でね。

杉目　誰だてそうさ、おぎゃあと生まれ落ちた時から、何かを待つ事になれてる奴なんていやしねえ、だがこの俺はどうだ、待ったんだよ、待ち続けたんだ、この日を、こんな黄昏のうだるような時を。

だってそうだろうが、それが俺に与えられた唯一の役どころだったんだから――

一人の女、蛍が、杉目に近寄り、そっと肩に手をやる。

杉目　そんな目はよせ！同情か、あわれみか、（蛍ゆっくりと首を振る）

お前に分かるか、分かってたまるか、来る日もくる日もその時を、つまり死ぬ時を待ち続ける気持ちって奴が――分かりっこないよ・・・・いいか、そいつは夢ん中にだって毎晩やってくる。真っ青なのっぺらぼうで、蒼白い長い腕で、俺の首っ玉をしめあげるんだ、うッ・・・・（ト思わず自分の喉をしめている――不意に吾に返って）――（弱々しく）わかりゃしない

蛍　分かるわ私には・・・・・

杉目　分かるっていうんだな、本当に――

蛍　（うなずく）

杉目　分かるんだな、あいつ（ト一人座っていた男義経を示し）よりも俺の気持ちの方がお前にはよく分かるんだな。

蛍　（チラと義経を見る）

杉目　どうなんだ、どっちを選ぶんだ、あいつと俺と――

蛍　・・・・・・

義経　（静かに）止めろ。

杉目　止めないね、止められないね、俺は待ったんだよ、充分すぎる程に、あなた様のおっしゃる通り、こちらの方の（ト弁慶を指差し）筋書きの通りにやって来たのさ、夢も望みも、人格も、何もかも脱いで脱ぎ捨てて、自分以外の何かになり果てて死ぬために――どうやって生きるかじゃなくて、さりげなく、見事に死に望む方法まで教えていただいてね。

弁慶　止せ！

杉目　それしか言えねえのか、よせとか、止めろとか、駄目だとか――沢山だ、沢山だよ。

俺にゃあ分かってるさ、この男（ト義経を指差し）のドス黒い腹の裡は。

おい皆、いいか、今、この男の頭の中には、明日という地図であふれかえっているんだ――

義経　何だと――

弁慶　止めろ貴様！（ト杉目に）

杉目　どうやって逃げようか、どんな新しい衣装を着て、どの地図をたよりに

明日から生き延びようかとさ。

弁慶　おい――――（ト杉目に近寄る）

義経　（弁慶を止め）言わせておけ、好きなだけ。

杉目　なぜ黙ってるんだ皆、えッ、俺たちぁみんな待ってるんだ、仕方もなく、戦う事もせず、ただ敵が攻め込んで来るのを、じっと指をくわえて、それを宿命と決めたからだ。せめていさぎよく散ろうってわけだ――ところがどうだ、笑わせるぜ、ここに、たった一人、いや二人かもしれない、うまく逃げのびようって奴がいる、こいつはどうしたわけだ――この二人が特別えらいからか――それともずるいからか。

蛍　男のおしゃべりは嫌いだよ。

杉目　（笑う）おい蛍！俺は何もしゃべらずにやって来たんだよ、何もしゃべらずにこの男（ト義経に向けて）の陰に隠れるようにしていた、昨日までは。だが今日は違うんだ、しゃべらなきゃならないんだ。完成したんだよ、俺の芸が。今日こそ、俺が棟梁なんだよ。ここの頭は俺なんだ。（不意に蛍のアゴをつかみ）ところでお前、お前をそんなにまぶしく輝かせたのは、誰なんだ？俺か、それとも、あそこにいるあいつか、一体どっちなんだ。あいつがお前を俺からもぎ取った、いいや、お前があいつにほれた、どうでもいい、そんな事は……だが、かんじんなのは今だ、今。どうなんだ、はっきりさせたいのさ、お前の気持ちって奴をさ、真二つに引き裂かれたお前の愛って奴が、どっちを向いて、涙流してるのか――

そいつを皆の聞いてる前でさ。

伊勢　やめろよ、やめようよ、そういう事は、静かに待とうじゃないか、

杉目　やめないね

弁慶　どうしてもか。

杉目　あぁ、どうしてもだ。

弁慶　よし、それならば…

杉目　殺すか俺を――

弁慶　その必要があれば（ト殺気）

杉目　出来るかな、やれよ、やってみろよ、俺を殺したらどうなるのか分かってるんだろうな。あんた方は、すんなり逃げるってわけにゃあいかないぜ。奴等が欲しがってるのは、たった一つの首だ！だがそれは少なくともこの俺の首じゃねえってことだ。それが出来るか、えッ、あんたに（ト義経に向かって）自殺する勇気もないんだあんたは――

弁慶　言わせておけば（ト つかみかかる――もみあう二人）

蛍　選ぶよ！私――

男二人、動き止まる。

蛍　お前を選ぶ――（ト杉目を抱くように崩折れる）

杉目　よし――分かった（ト蛍の肩をおさえて抱き起こし、少し離れて立たせる）

――間――

杉目は、いきなりふところに持っていたカミソリで蛍の着ているものを切り裂く、一条の鮮血がほとばしって、だが、かすかな傷だけで蛍は上半身裸にされる。

杉目　踊るんだ俺のために――ここで死んで行く者だけのために――

いつしか夕陽がさしこんでいる。音楽けだるく入る。三十年代の音楽、蛍、踊り出す。やがて、蛍は激しく妖しく踊る。周囲の者、まるで、あきたように、その踊りを見るでもなく、見ないでもなく、時が流れる。

プロローグに出た片岡が帰って来る。

踊りの中次ぎのやりとり。

弁慶　始末したか。

片岡　間違いなく。

弁慶　ご苦労だった（弁慶は義経に近づき）

弁慶　無事に終了しました。

義経　分かった。（片岡、近づいて来る）

片岡　それから。

弁慶　何だ。

片岡　明朝だそうで、帰る途中確かめました。

義経　あしたか！間違いないな。

片岡　はい、明朝。

義経　よし、（ト大きくため息）

弁慶　あした……・

男達の間を縫いながら蛍は舞う

踊りきまって、暗転。

第二場

人物――影法師、弁慶、義経、木曽善仲、梶原、継信、忠信、杉目、常陸坊、鷲尾、伊勢、しょうもん坊、常盤、牛若丸、蛍。

幕前――上手前、影法師一人。

影法師　不知（しらず）、生まれ死ぬ人、何方（いずこ）より来たりて、何方へか去る。また知らず、仮りの宿り誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

その主と栖と、無常を争うさま、いわばあさがほの露に異ならず、或は露落ちて花残れり、残るといえども朝日に枯れぬ、或は花しぼみて露なほ消

えず。消えずといへども夕べを待つことなし、

――八百年、約八百年の時間を遡ったとしたら……そこに一人の男が居る、あの方と呼ばれた男……孤独と放浪の中から二十六歳で、突如として陽の当たる場所に踊り出た青年……寿永三年、一一八四年一月二十日

（息をひそめて）辰の刻、朝六時、戦乱に怯え、ひとっこ一人いない凍てついた京の都大路を数騎の馬が駆け抜けた。

あれは……凩（こがらし）か、身を縮めたこの列島を吹き抜けるあれは凩なのか……

数匹の馬が急ぐひずめの音――止まる、門を力まかせに叩く音。

男の声１　誰だ？

男の声２　誰なんだ。

男の声３　木曽善仲か、奴が後白河法皇を襲いに？

男の声１　あの木曽の山猿が――

男の声３　しかし倶利加羅谷で牛の角に松明を括りつけ平家七万騎を滅ぼした善仲。

男の声２　何をしでかすか、分かったものではない。

弁慶の声　誰か誰か出てこい！

男の声１　誰だ木曽善仲か？

善経　違う！善仲は俺の手で滅ぼした。

男の声２　では一体誰だ！

義経　源頼朝の弟九郎義経だ。御所の警備に来た。開けろ！門を開けろ、この俺の為に――源九郎義経だ！

門の開く音、音楽。

影法師　門が開けられた。たった一つの門が、そしてこの門から源義経は初めて歴史の表舞台に躍り出た。義経齢（よわい）二十六歳、破れ去った木曽義仲三十歳。兵を挙げてから僅か三年の激しくもはかない命だった。

さて、ここ一の谷――十万騎の平家の軍勢がいる。東は生田の森を固め、前は海、後は断崖絶壁の要塞であった。

一方源義経の陣営は三人の影武者を従え軍議の真っ最中である。

第一の影、佐藤三郎兵衛継信。第二の影、佐藤四郎兵衛忠信。第三の影、杉目小太郎行信。（ト指差す彼方に義経の軍団が現れる）

梶原景時　戦には戦の掟というものがある――九郎殿は後々、板東武者が卑怯者呼ばわりされてもかまわんというのか。

義経　後の事はどうでも、我々は今、この現在に生きる。坂東武者の評判など構っていられるか。いいか景時、この戦何のためにやる。

梶原　知れたこと、源氏の白旗でこの国を埋め尽くし、平家を悉く（ことごとく）滅ぼす為に。

義経　そうさ、勝ってこそ戦！戦に負けはない。

梶原　ならば、夜討ちも騙し討ちもかまわんと。

義経　そうだ、勝つために手段は選ばぬ。

梶原　しかし、坂東武者にはそれなりの誇りと――

義経　しかしはない！敵の油断を突くのが兵法の基本だ！三郎継信一の谷をどう攻める。

三郎継信　海を！

義経　海？四郎忠信――

四郎忠信　やはり舟を調達し、密かに一の谷の西へ上陸し。

義経　成る程、お前達はたいした兄弟よ、片岡八郎。

片岡八郎　夜討ちだな。

義経　ほほう、八郎、お前はわしと同じ意見だ。

おい、どうやって夜討ちをかける、常陸坊海尊。

常陸坊　やはり舟を――

義経　もういい！杉目、お前はどう思う。

杉目　明かりを消した舟を――

義経　（不意に近付き杉目のえり首をつかみ、やにわにたたき落とす）

馬鹿者！舟だと、海だと、そんな発想で、十万騎を越える平家に勝てるか、

忠信、味方は何騎だ。

忠信　範頼様の軍勢を合わせて、一万騎ぐらいかと。

義経　だろうが――杉目、お前は一体何だ？

杉目　はッ！

義経　はッじゃない、お前は何なんだと聞いている。

杉目　あなたの身代わりでございます。

義経　そうだ、しかも、一、二、（卜継信、忠信を指差し）三番目のな――言ったはずだ、身代わりはどうしなければならないかを……言ってみろ、

杉目　似せろと、あなたにこの杉目を似せるため身をけずれと。

義経　何を似せる。

杉目　姿と形と、作法と……その……

義経　姿形を似せるのは佐藤兄弟にまかせておけばいい、お前に大切なのは、姿でも形でもない、影武者があざむくのは、まず味方だ、味方の目だ、そのためにはどうする。

杉目　さぁ、その・……・

義経　じれったい奴だ、その為には姿より心、形よりこの俺の体内に流れる血そのものを似せなければならない。なぜ俺と同じ発想が出来ない、愚か者！何の為の影武者か！――間――一の谷の背後から馬で夜討ちをかけると何故言えない。

男達のどよめきがあがる。

梶原　おそれながら、それは無理というもの、義経殿はあの辺りの地形がよく分

かっていない。

義経　黙れ梶原、そんなことは先刻熟知している。いいか、十対一だ、この一で何としても十を滅ぼさねばならない、そんな時に戦の掟も通用しないことを知れ！

常陸坊　それにしても、あの鵯越え（ひよどりごえ）の断崖は馬では降りられません。

義経　降りるんだ、人が出来ないこと、いまだかつてやったことのないことをやらなければ、この戦には勝てない――

しょうもん坊――あの絶壁、馬は降りられるか。

しょうもん坊　馬は無理です。

義経　では鳥は。

しょうもん坊　鵯ならば羽がありますから。

梶原　馬に羽ははやせまい。

義経　では、他に、リスは。

しょうもん坊　リスや野ねずみなら楽に。

梶原　リスの背中に乗って降りるか吾々も（ト笑う）

義経　うるさい！この口へらずの女武者め！

梶原　何？（キッとなる）

義経　（静かに）俺は、しょうもん坊に聞いている。他に動物は？

しょうもん坊　動物がどうしました。

義経　ええい、崖を降りる動物はいないのか。

しょうもん坊　うさぎ、へび、ごきぶり・…・ああ、そういえば時折鹿が――

義経　馬鹿、なぜそれを早く言わない、馬鹿とはまるでお前達をさした言葉のようだ。いいか、馬と鹿は同じようなもんだ、どっちがどうでもいい、同じ程度のもんだから合わせて馬鹿と書いてバカという。鹿の降りる道、馬が降りずに馬鹿がつとまると思うか。よし、あの谷を馬でズリ落ちる、ズリ落ちて、眠っている平家の阿呆どもを背後から討つ。

梶原　無茶であろう。

義経　たまには無茶という苦い茶を飲んだらどうなんだ、命けずって馬鹿を承知で戦わずして何の戦か――景時、お前がどんなに力んでも俺に及ばないのは何故か?そいつは絶望の深さの違いだ――

梶原　違う!絶望の中で何もかもが失われ、時に人は狂ってしまうこともあるのだ・…・そのことを乗り越えて――

義経　いいや、お前の絶望を俺は認めないぞ!ほどよく平穏に行こうという望みがあったとしても、お前には絶望がない。

梶原　違うぞ義経!戦にも道があるだろう。平家の背中から、命の危険を犯してまで襲う必要がどこにあるんだ。

義経　戦とは創造だ――もがき苦しみ喘ぎ、やがて全き空白――その絶望の淵から人は歩き出す。

人は何かを創り出すんだ。たとえそれが間違ったとしてもな――（間）―
者供、馬を曳け、夜を徹して鵯越への道を踏み分ける。

男達　おう！（ト鬨（とき）の声を上げて退場）

馬を曳け！出陣だ！の声飛び、馬の足音等。義経第三の影武者杉目を呼び止める。

義経　待て！小太郎行信

杉目　……

義経　いつになったら、お前はこの俺に近付ける……えッ……遠いんだよ、お前から俺へのこの距離が遠すぎるんだ。いいか、影武者の使命とは、この俺に限りなく近付くことだ、その心、その想いを――
影は偽そのものになりかわった時、初めて己れの陰影を持つ――己れがありすぎるのよ、強すぎるのよ自分が・・・・棄てろ、棄ててしまえ、そんな貧相な、お前の思い、お前の家柄、お前の自尊心、お前のちっぽけな愛、汚れ切った欲望、棄てるんだな早く、一切を――

杉目　絶望はしています、すでに、おそらく、あなたよりも深く、自分自身に対して――

義経　（笑う、一変して）違う！違うぞ杉目――そんなことは絶望とは云わない、それは自己嫌悪だ――そんなことは誰にだってある、まだ若いな、お前――

杉目　あなたと同じ年です。

義経　それが何だ、俺にとって若さとは醜さだ、お前は心に鎧を着ている、俺は裸だ――青臭い自己嫌悪の醜い鎧など、とっくの昔に脱ぎ捨てた――

杉目　成る程、私の心は鎧、あなたの心は裸――ではあなたの云う絶望とは何ですか。

義経　（虚空を指差し）何が見える……

杉目　何も……

義経　そう……何も見えない……何もないからだ……（調子変わって）

……杉目、お前七歳の時、どこにいた。

杉目　奥州は藤原の――

義経　違う！まだ分かっていない（ト杉目の手をひねり、背に馬乗りになる）分かっていないんだな、よく聞け。

お前は七歳の折、奥州どころか、鞍馬山にいたのだ――言え、言ってみろ、どうなんだ。

杉目　その通り、鞍馬山で牛若丸と呼ばれ――

義経　（杉目を放し）よし、牛若丸、しゃべってみろ、お前の汚濁にまみれた幼い日々を――

杉目　（何かに憑かれたように）桜、狂おしく咲いていました。

一人の阿闍梨（あじゃり）に連れられて、あれは七つの春でした、私は鞍馬寺の稚児になりました。

義経　稚児とは何だ！

杉目　阿闍梨、沢山の僧達の慰み者――夜毎に僧が入れ替わり立ち替わり私の貧しい寝室にしのび込んでくるのです。思い出すのもおぞましい――

義経　牛若、何故死ななかった！（この辺り、義経も苦しい自虐の限界にきている）

杉目　七つの子に意思がありますか、自らの命を断つ勇気が七歳の魂に――

義経　違う！そこが違うぞ――七歳の牛若にはあったんだ、死の意思が――いや、その実行力さえ奴はすでに持っていた。

杉目　では何故？

義経　俺が聞いているんだ、何故だ・・・・それほどの屈辱にまみれ何故死ななかった――言え、言ってみろ！牛若。

弁慶が先程から様子をうかがっている

この時、一人の女、蛍が弁慶とは逆の所に出て盗み聞きをはじめる。

杉目　憎き清盛、いや、平家への怨みです。

源氏の再興なくして父左馬頭義朝（さまのかみよしとも）の無念は――

義経　違う！違うんだ、依然としてお前には、何も分かってはいない。

杉目　では一体？

義経　母だ――母常盤（ときわ）だ。

音楽

影法師　平治元年一一五九年十二月二九日、義経の父源左馬頭義朝、平治の乱に敗れ、逃亡す。明けて平治二年一一六〇年、十二世紀の六十年代が始まった、同一月四日義朝殺害さる――年（よわい）三十八歳、かくして義朝の愛人常盤は、今若、乙若、牛若の幼い三人をつれて雪の中をさまよう、そして遂に力つきた常盤は三人の子を連れ六波羅（ろくはら）へ自首する。常盤、平清盛に謁見（えっけん）する。

引き裂かれたように赤ん坊の声聞こえる。

舞台奥、常盤現れる。

舞台上手、影法師衣装替えを手伝ってもらい平清盛（四二歳）に変身する。

清盛　十年一昔とはよく言ったもの、なつかしいなあ常盤、まさか十年後に俺とこんな逢い方をするとは思いもしなかったろう――

常盤　いいえ、そんな風には――

清盛　どんな風だと、一昔前、一人の誇り高い女がいて、名もない北面の侍が一人居た、例えば源義朝、例えば佐藤義清即ち出家して西行、例えば平清盛――誰でもいい、誰にだってある、ありふれた話だ。

その美しい一人の女を二人の男が争った、だが女は結局、一人の男を選んだ、そいつの見栄えがよかったからか、それとも、そいつがもう一人の男より出世しそうに思えたからか、或は情が深かったからか――

常盤　やめて下さい。

清盛　やめよう、昔の話だ、何が望みだ。

常盤　たった一つのお願いがあります。

清盛　言ってみろ。

常盤　子供達の命を助けていただきたいのです。

清盛　いかにこの清盛といえども命を三つ、ひとまとめには出来ない。三人の子ならば、それぞれ三つの願いを聞き届けなければならない、その願い、高くつくぞ――本来なら即刻打ち首になっても仕方のない所。

常盤　分かっています、この私の命に代えても、あの子達だけは――

清盛　親はなくとも子は育つ、それならやがて大人になってその子達が、俺の寝首をかかないと誰が保証する。

常盤　保証はありません、三人とも出家させ、万が一にも謀反（むほん）なきよう仏の道に――

清盛　万に一つがあっては困る、では保証をとろう。

常盤　どのように――

清盛　簡単なことだ、お前が保証になればいい。

常盤　では私の命を――

清盛　命まるごと、身体まるごと、愛まるごと、合わせて担保三つ！（ト笑う）

常盤　愛といえば三人の子供を助けることによって私の愛は何もなくなり、身体といえばもう抜け殻――残るのは命だけ、さあ、首をはねて下さい、今ここで。（ト目を閉じる）

清盛　（ゆっくりと常盤に近付く）

女は何時の世も美しくありたいもの、その美しさがあればこそ、生きながらえる術もあるフフフフフ……

常盤　さあ、早く。

清盛　あわてることはない、時として人生は短い、だが夜は長い、ことに、懐かしい夜は……（ト常盤を背後から抱きすくめる）

常盤　あッ。

義経　（その光景をまのあたりに）桜狂おしく咲いていました、一人の阿闍梨に連れられて

牛若丸（女が扮する）出て来る

牛若丸　一人の阿闍梨に連れられて、あれは七歳春でした、私は鞍馬の稚児でした。

桜醜く散りました。あれは七つの春でした。

母さん！あなたが身を売って拾ったこの命に（ト自らを指す）それでも花は咲きますか。それでも、桜は美しいと言い続けなければいけないのです

か。牛若は男です。武士の子です。源氏の子です。

その牛若が何故夜毎夜毎、僧侶たちに、女のようにあつかわれ、汚されるのか――母さん！桜の満開を歯を食いしばって、あと八回見ましょう、八回見たら、この山降りて、殺します、あなたを――

その時のために……命捨てられません。

常盤　牛若！

牛若丸　呼ぶな、呼ぶんじゃない、そんな男の、臭い息の下から、私をよぶんじゃない

不意に背後から面をつけた弁慶に抱きすくめられる牛若。そのままで台上の常盤と清盛、台下の牛若と弁慶、不動。

義経　桜狂おしく咲きました。

杉目　桜醜く散りました。

奥に蛍も居るままに。

音楽――暗転

第三場

人物――影法師、義経、継信、弁慶、蛍、常陸坊、忠信、伊勢、しょうもん坊、梶原、静。

影法師　二月七日あけ六つ（午前六時）一の谷大手から攻める義経の兄範頼（のりより）配下の本隊が生田の森から海岸沿いに平家の陣に攻め入る。

一方、土肥実平（どひさねひら）の軍が明石から海沿いにこれをはさみ打つ、そして、たった三十騎の義経の軍が今、鵯越（ひよどりごえ）の断崖絶壁の上に居た。

日本の戦略史上、いまだかつてないそれは、まさに画期的かつ革命的な戦略である。

ほぼ直角に近い谷を、誰が攻め降りてくると予想しよう。

平家の誰一人として信じ疑うことのなかった絶対安全という天然の要塞は、今、この瞬間に革命児義経によってその幻想を打ち破られようとしている。

義経の頭の中に不可能という文字はなかった。幻想を抱くのは常に凡百（ぼんぴゃく）の徒（と）で、狂人と天才は時として幻想を真二つに割ってみせる。割れた幻想の中は、したたかな血の匂いがする。

鬨の声が途中から入ってくる。眼下の深い谷を見下ろす義経他数名騎馬戦の形を

とって現れる。

義経　見えないか！源氏の白旗はどうだ。味方はどうした。

忠信　苦戦のようです。平家の紅（くれない）の旗で埋まっています。まるで血の海だ――

武蔵防　ここは無理です、他の道を。

義経　無理は承知だ！これしか道はない――

武蔵防　戦わずして、下に降りるまでに吾々は全て命を落とします。

義経　命落としても、これしか道はない。

俺が先導を切る――ついてくるのか、こないのか。

武蔵防　やめて下さい！

義経　返事がないのはどうした！おじけづいたか！俺に続く者は手を上げろ！

どうした、大将を見捨ててお前達はしっぽを巻いて逃げ帰るのか――

それならば――

蛍　待って！私行く。

義経　蛍！

杉目　私も！

義経　遅い！杉目、決断が遅すぎる、何のための影武者か。お前は帰れ！勝手に

帰るんだ、この戦さ加わること許さん、他の者は、

男達　オ――

義経　よし！

杉目　どうかお許しを、私も一緒に。

義経　駄目だ。

杉目　お願いです。

蛍　杉目を許してやって下さい。

義経　蛍――女の情が通じる時か！

蛍　杉目は他のことを考えていたのです。

義経　この肝心な時に他のことだと。

蛍　いいえ、杉目はこの度の戦さで、どうしたら源義経のうつし姿になれるかと――

義経　そんなことは、おととい考えろ、いかにお前の頼みでも、杉目は今度は認めない！帰れ。

杉目　許して下さい。

義経　未練が過ぎる（ト杉目をたたき伏せる）いくぞ、ものども！

男達　おう――

音楽　合戦

影法師　世に云う一の谷の合戦は鵯越の逆落とし――何しろ駆け降りるなんていう生易しいもんじゃない。

馬が坂をころげ落ちる。人もズルズルと落ちて行く。

思うに人馬一体とは、この時に生まれた言葉かもしれない。

とにもかくにもこの戦さ、義経軍団の奇襲によって源氏側の圧勝に終わった。さて、時移り所変わって、同年夏、京は義経の住む堀川の屋敷。

弁慶　伝説は作るのです。短い夏の夜に、ひととき光り輝く蛍であってはなりません。あなたは歴史という大河の流れを左右に分ける巨大な岩でなくては。

義経　どうすればいい。戦に勝つ、勝って平家一門を滅ぼす、それで充分じゃないか。

弁慶　仮にあなたが、これからの戦に全て勝ったとして。

義経　勝ったとして？

弁慶　あなたの前に立ちはだかっているもっと大きなものが邪魔をします。

義経　何が――

弁慶　頼朝公です。梶原景時が、鎌倉で、あることないことを頼朝公に申しのべているのです。いかにあなたが腹ちがいの弟とはいえ、頼朝公にとって景時は直属の家系――あの方は景時の讒言（ざんげん）を信じきっておられます。

義経　しかし、たとえ腹違いとはいえ、血を分けた兄だ、やがて時がくれば――

弁慶　それは甘い、源氏は父、兄、弟と互いの血で血を洗い骨肉の争いをしてきたではありませんか。

義経　俺にもそうしろというのか。

弁慶　私は鎌倉へ行って、頼朝公に会うこともできなかった。乞食あつかいされた……・この私は。

義経　何故だ？

弁慶　僧兵のなれの果て、物乞いのような奴に会うわけにはいかないと――私個人に対する侮辱ならともかく、考えて下さい、このことは、あなたへの侮辱に他ならない。――何故なら、私があなたの家来だから――

義経　どうしろというんだ。

弁慶　侮辱だけならいい、心がしたたかでありさえすれば、そんなことはどうにでもなる――だがしかし、情報だけは正確に伝えなければならない――一の谷の勝利は、ほとんどがあなたの功績です、だが景時の偽情報によって……

義経　もういい、いいんだ。

弁慶　あなたは頼朝公を滅ぼせますか。

義経　何を云う、口をつつしめ！

弁慶　出来ない！兄を殺し、その屍の上に自らが座る程、強くも冷酷でもないんだあなたは――

義経　許さんぞ弁慶！

弁慶　頼朝公にはそれが出来る――やがてあの人から命を狙われるのは、あなたです――

義経　まさか……そんな……

弁慶　先の先を読まなければ生き抜けません。

義経　兄が、この俺の命を――

弁慶　こうしている時が、日々戦場です。そのことを忘れないで下さい。

あなたの刃は確かに鋭い――-だが、やわいのです、すぐ折れてしまいます。思い出して下さい。あの五条の橋の上がそうでした。

音楽　童謡　京の五条の橋の上入る。

その立ち回りの再現。何故か牛若は弁慶に敗れてしまう。

鴨川に溺れる牛若。

弁慶　しかし、人々は噂しています。

義経　何と？

弁慶　千本目の刀を奪いそこなって敗れたのは、この弁慶だと。

あなたは横笛一本で体を交わし、刀さえ抜かずにヒラリヒラリと・・・・

義経　まさか……

弁慶　だから伝統だと云ったのです。伝説を創る者のみが、いいえ伝説に値する者だけが英雄となります。

義経　弁慶が敗れたという噂の火元はお前か？

弁慶　（笑う）

義経　恐ろしい男だ。

弁慶　法皇から左衛門少尉検非違使の位をいただいて来ました。今日からあなたは源九郎判官義経です。

義経　この俺が判官に（驚く）そうか――しかし鎌倉の兄が承知しないだろう。

弁慶　せいぜい頼朝公を怒らせることです。

義経　弁慶、何をたくらむ、何がねらいだ。

弁慶　あなたは宋に伝わる、あの伝説の鳥、不死鳥です。伝説の中に生きるのです。そのための影武者、佐藤兄弟や杉目を有効に使わなくては。

義経　不死鳥か――しかし、なぜ杉目を俺に似せるために静や俺の愛人までも奴に与えなければならない――俺には分からないぞ！一体、何のために――

弁慶　止めますか、止めてもいいんですよ。

凶暴で平凡な武将としてその他大勢の歴史の河の砂利になり果て――

義経　止せ、弁慶――しかし、女達が承知しないぞ。

弁慶　戦略です――戦さだけが戦略ではありません……やがて時が来る、その時あなたを救う、これは唯一の方法です。あなた自身のその手で歴史を作るのです！

義経　……だとしても、たとえ同じものを食わせ、同じ女を与え、同じ待遇を与えてやっても、果たして杉目が本当に限りなく俺自身に近付けるのか、石はいくら研（みが）いても石だ。

弁慶　確かなことは常にありません、しかし、やってみなければならないのです、スレスレのところまで。偽を本物らしくするためのあらゆる努力を――

義経　俺には分からない、確かにお前の考えは常に鋭い、先見の明もある、しかし、その鋭さが地獄をつくるのではないか。

弁慶　信じてくださいこの私を、私はあなたに賭けたのです。

義経　それは分かっている――だが今は一刻も早く平家に戦さをしかけたい。

弁慶　時機を待つことです。

義経　物心ついた頃から待たされ続けた、身分を隠し、怨みつらみを密かに封じ込めて待たされつづけた。

もう待てない、待てないのだ――この俺は！

暗転

義経と静

静　……ひんやりしていい気持ち（卜義経の胸に触れながら）・…・何が棲んでるのこの中に、この胸、涙の住みか、それとも人殺しの暗い血が棲んでるの。

義経　空っぽだ…少なくとも今は――

血が淀んでいる、血が淀み切って動こうともしない。

静　空っぽでよかった……私、その中に棲むひっそりと身をちぢめて…・

ねぇ、私の何処に棲むのあなたは。

義経　さぁ、何処かな――凶暴で粗野だから、きっと棲まわせてみたところでやがて逃げ出すのは静――お前の方じゃないのか。

静　いや、他のことを考えては駄目、私だけを今は見て、私のこと考えて…・
私の何処が好き、私の瞳は。
義経　好きだ。
静　どんな風なの、ねぇ、言って。
義経　たとえば、海……
静　私の唇は？
義経　真綿のような雪……・
静　私の胸すき？
義経　ああ
静　胸と足とどっちが好き？
義経　両方ともさ
静　――お願い、私と居る時に他のことなんか考えるのはやめて。
義経　一体鎌倉の兄は何を考えているのか、こ―俺の一の谷での功績を全て無視
しているとしか思えない！その事が……・

明かり切り替わって、杉目と蛍

杉目　楽しいか蛍。
蛍　別に
杉目　くにへ帰ろう――

蛍　どうして？（驚く）

杉目　奥州へ帰って、山の中で、木を切り倒す。夜明けから日の暮れまで汗流して……

蛍　源義経になるのはやめたの。

杉目　影武者はうさんくさい、それだけならいい、だんだん自分が自分でなくなる……なぁ蛍、雪だ、雪が降っていたよ、果てしもなく。二昔も前のことだ……本気出して俺が雪ん中へ投げ飛ばすと、お前よく泣いた…・泣きながら男みたいに、そこら中の雪をつかんでは投げて、目が開けられなかったぜ、終いには俺が手を上げて、参った、参ったって言っても泣きじゃくりながら俺を雪の中へ押し倒して……

蛍　やめてよ――ここは真夏の京の都よ、もう二度と私達子供になんかなれっこない……

杉目　あれは幻か――だが、くにへ帰りさえしたら、やり直しは出来るだろう、何もかも――

蛍　弱いなあ、弱い小太郎行信は嫌いだよ、私が一緒に国を出て来たのは、そんなあんたを見る為じゃなかった。

義経と静に明かり

義経　分からない、一体、自分が何処に居るのか。

鎌倉の兄によって、或は、あの後白河法皇の気紛れによって俺の存在が明らかにされる――-そんなことは御免だ、俺は俺の意思によって平家を滅ぼす。

静　走ってはだめ、ほとぼりのままに走りつづけたら、きっと死に急ぐわ。

義経　静、お前は決して走らない、一体お前は――

静　やどかり……震えながら　疑深く棲（すみか）を探すやどかり……

義経　やどかりなら棲を見つけさえしたら、たとえそれが、ひとときだとしても、そのあたたかさの中で孤独を忘れられる。

静　ほうとうにそう思う？

義経　あゝ、――だが俺はこの国を自らの手によって源氏の白旗で埋め尽くさなければならない。が、そのためには数えきれない障害があり、もし、仮にそうなった時に、人々は言うだろう――あの旗を見ろ、あの旗はもう白くない、平家の血にまみれてドス黒いじゃないかと……

静　ねえ……ほんのちょっとの間でいいの、棲まわせて私を……そして、もっと愛して、言葉でなく、あなたの心で飾ってこの私を――そしたら私、もっともっときれいになる、あなたのために――

義経　静、頼みたいことがある――

静　何？

義経　たった一つのたのみだ、これだけは……

静　何でも聞くわ、何？

明かり杉目と蛍

杉目　誰かがどこかで、いいや、ここで、俺の血を吸い取っている。まるでヒルのようにゆっくりと、しかもしつっこく。

蛍　血吸われたら吸い返すのよ――そのために国を出て来たんでしょ。

杉目　しかしもう疲れた、こんなくらしは――俺は所詮、田舎者だ、源氏の御曹司のように、うまくは立ち回れない。

蛍　あいつだって田舎者さ、歌一つ詠めるわけじゃなし、家柄がよかっただけさ。

杉目　だが、あの人には閃きがある。独特な戦さの勘がある。それだけで俺はもうかなわない。

蛍　帰ったら――帰ればいいじゃないの、平泉へでも何処へでも、たった一人で――

杉目　お前、ここへ残るのか。

蛍　あゝ、つまらない普通の女に戻るのはいや――

杉目　何が楽しい、着飾ってうまいもの食って、いいように使われて、やがてボロボロになって何処かの野辺へ、しゃれこうべをさらすだけだぞ。

蛍　いいの、そんなこと……戦が好きだから、うるさいことはいやだわ。ここでは、ただ強ければいい、手柄さえたてれば――

義経と静へ明かり

静　いや、いやよ、なんて残酷な人なの、ひどい、ひどすぎるわ――それがあなたの本心なの？

義経　心を鬼にして頼んでいる――分かってくれ、杉目をこの俺に限りなく似せ、本物の義経に近付けるために、どうしても必要な戦略なのだ。

静　戦略？戦略のために……そんな理不尽な…何故なの、どうしてそんな事ができるの、あなたは――

義経　俺に背負わされているのは歴史だ、伝説だ――それは確かに幻かも知れない、しかし、それを負わない限り俺はただの残虐な人殺しにしかならない、分かってほしい。

静　あなたが何を背負おうがかまわない。あなたに影武者が必要なのもそれでいいわ、でも私は影の中にまでは棲めない――杉目と床を共にするなんていや！

義経　愛せとは言わない、ふりをすればいいのだ。

静　（笑う）ふり……ふりだけで人を騙せるの。偽の愛を与えられた杉目が、いつの日か本物にまごうばかりの源義経になるの――そんなことありっこない。偽を与えられたものは、やがてつまらない偽物になり果てるのよ

――

義経　しかし……しかしそれは……

杉目と蛍へ明かり替わる

杉目　お前、あの方にほれたな。

蛍　やきもち――でもあんたよりはましかも知れない、あの人は自信にあふれているもの。

杉目　その自信が、この俺を駄目にする。俺ばかりじゃない、これは罠だ、何か見えないところで俺達は見せかけの自由を餌に、骨抜きにされていってるんだ、分からないか。

蛍　それならそれでいい――戦さが好きなの、血に混じった男達の汗の匂い……

義経と静の空間へ

義経　何故泣かない――何故涙を流さない！

静　嫉妬しているのね。頼んだ先から、まだ私が何も引き受けていないのに、もうあなたは嫉妬している――

涙よりももっと苦しい事がこの世にはあるわ、悲しみよりももっと果てしなく悲しい事があるのよ。

義経　あれはいつだったか、夕暮れの光りを背に受けて一人の女が踊っていた。
人だかりの向こうの小高い所で、まるで少年のように涼しい眼差しで、
夕日に染まったうなじを小刻みに激しく動かせて・・・・お前は踊っていた
確かに――――俺はまだ名前ばかりが重く先走った行くあてのないつまらん
男だった……
あの時だ、あの夕暮れから俺達の一切は始まった……・

静　そうよ、あなたはまるで血に飢えた狼のようだった――――でも、それを今、
台無しにしようとしているのはあなたよ――――

義経　静――――

静　少なくとも……私じゃない――――いいわ、聞いてあげるあなたの言う
通りにするわ。

杉目と蛍二人

杉目　蛍――――帰ろう、国へ（ト抱きすくめる）

蛍　抱いてもいいよ、――――でも帰らない私――――

杉目　蛍！

弁慶が佇んでいた

弁慶　杉目

杉目　はッ（ト気づく）

弁慶　今夜は西の間へ行け。

杉目　静御前の――何のようですか。

弁慶　用はない、そこで眠るのだ。

杉目　眠る？この私が、静御前の部屋で、何故？

弁慶　質問はするな――一刻も早く源義経にお前自身が自分を近付けるためだ。

杉目　しかし。

弁慶　黙って行け！――蛍……　お前は源義経公の所へ――

杉目　そんな理不尽な、そんな馬鹿な――

弁慶　断れば、この場で二人とも切る。

杉目　いいだろう、切ってもらおうじゃないか――

弁慶　よし！覚悟はいいな。

杉目　いいとも、さあ蛍、お前だって……

蛍　あッ、始まっちゃった……（ト腹の辺りをおさえた）

男二人、あっけにとられる――

音楽　暗転

第四場

人物――影法師、伊勢、常陸坊、しょうもん坊、継信、忠信、梢、楓、蝶、片岡

影法師　かつてなかった集団がある。わずかばかりの、家柄も前歴もあやしげな侍や坊主や百姓のおちこぼれが、馬をあやつり、馬を乗りつぶしては乗り替え、風のように長い列島を駆け抜ける。そして自らの数十倍もの圧倒的な数の軍団を奇襲で打ち砕く。

ただこの軍団が頭にいただくのは源氏の御曹司九郎義経であった。

手柄さえ立てれば、腕さえよければ彼等は他の堅苦しい家来達と違って気ままであった。

だが……・本当にそうだろうか、そんなに気ままな自由で爽快な集団が、たとえ歴史上であったにしても存在し得たであろうか・……・

舞台明かりが入ると、その侍達と女が居る。

女達は洗濯をしている。

男達酒を飲んだり、時に洗濯を手伝ったり――

伊勢三郎義盛　そんなうわさは聞いた、しかしまさか――

常陸坊　うわさじゃない、事実だ。

しょうもん坊　お前見たのか。

常陸坊　（含み笑い）……

しょうもん坊　言えよ、見たんだろ。

常陸坊　おがませてもらったよ、たっぷりと（ト笑う）

しょうもん坊　こいつ（トこずいて）うまくやりやがって。

伊勢　だが考えられん事だ――

継信　杉目はあの方のお気に入りだ、あり得ぬ事じゃない。

しょうもん坊　お前等兄弟はどうなんだ、お前等だって、影武者だろうが、それとも影武者にも格があるのか、えッ、おこぼれはもらえなかったか。

忠信　おい！しょうもん坊、云っていいことと悪い事があるぞ。

しょうもん坊　何言ってやがる、だって、杉目が静と床を共にしたのが事実なら――お前達だって。

忠信　俺達兄弟をあなどるのか。

しょうもん坊　あなどりゃしねえよ、格の上、下を問題にしてるのよ。

忠信　何を！（トつかみかかる）

継信　よせ、忠信やめるんだ（ト忠信を止めて）――いいか俺達には断じてそんな事はない。

しょうもん坊　お――おこええ、こええ。

伊勢　すると、杉目だけが静と……

常陸坊　いいや静だけじゃないぜ。

伊勢　何？

梢　その話本当？

常陸坊　本当だ、あの方の愛人皆だ。

梢　まさかぁ――

継信　しかし何のために。

常陸坊　分からん、そこが俺にも分からん、何の為に――

忠信　分かった――なッ兄さん。

継信　何だ。

忠信　俺達にあの方は何と言われた。

継信　何を。

忠信　つまり俺達が影の役目になるについて。

継信　それは、姿を似せろと、形から入れと。

忠信　そうさ、歩き方物腰、顔形、それを似せる為に稽古した。

弁慶も言ったじゃないか、型さえ決まれば、おのずと心定まると――

しょうもん坊　それが何の関係がある忠信。

忠信　まあ待て、ところが杉目にはどうだ、まったく逆の事が言われていた。心を似せよ、そうすればやがて姿形は定まる――

しょうもん坊　で？

忠信　だからつまり、違うんだ俺達兄弟と。杉目は同じ影武者でも、違う。

しょうもん坊　じれったいのう、それが、女の話とどう結びつく。

忠信　女、女ってうるさいなこのなまぐさ坊主――杉目と俺達は違う――だから、杉目には女を与え、俺達には、俺達には……・

継信　影武者にもいろいろある、その違いは分かる。だがそのために何も女の心まで引き裂くことはない……・

しょうもん坊　いいってことよ、戦さに強ければ全ては帳消しになる。

継信　そんなもんか、俺にはそうは思えん、それはお前や常陸坊海尊が破壊僧だからではないのか。

しょうもん坊　佐藤三郎兵衛継信お前育ちがいいのう、育ちのよさが命取りにならぬといいがのう。

継信　何？

しょうもん坊　上品なだけじゃあ、今の世渡れない。

伊勢　下品すぎても渡れぬがな。

しょうもん坊　何？そいつぁ俺の事か。

伊勢　いいや、例えばの話よ。

常陸坊　それにあの蛍だ。

しょうもん坊　蛍がどうかしたか。

常陸坊　代わりにといっては何だが、杉目があの方に差し出したらしい。

伊勢　まさか――

梢　うそでしょ、そんな事。

常陸坊　（あいまいに）ああ、まあ。

しょうもん坊　こののぞき野郎！

伊勢　もしそうだとすると一体あの方は何を考えているのか。

継信　あーあ、虫酸が走るわ！戦さが早く始まらないか、戦さがないなら、こんなことになる。あの方はどういうつもりでそんな事にうつつをぬかしているんだ

片岡　あの方には深い考えのあってのこと――俺達下の者が下世話な詮索は止めた方がいい。

継信　何だお前――

しょうもん坊　いたのかお前――存在が薄いぞ存在が片岡、今時の侍、腕だけでは目立たぬぞ、敵の前へ出たら、「遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、吾こそは鎌田三郎正近、人呼んで、しょうもん坊――」ぐらいの事えッ立て板に水のように華麗に呼ばねば――俺を見よ、俺を、腕はともかく、口と声だきゃあきたえておる、みがいておる、武士は見栄えが一番、とりたててもらわにゃあ、おまんま食い上げぞ（片岡スックと立った）――よ、よせ、ただ言ってみただけだ、本気にするな、腕はともかくと云ったじゃねえか、腕には自信ない――（片岡黙って去る）

あーあ、（卜安堵の息）

常陸坊　女にゃあ自信があっても腕はなしか（笑う）

一同笑う

しょうもん坊　おーお肝冷やした。

伊勢　一対一なら、まずあの片岡八郎にかなう奴はおらん――

継信　それに奴は何を考えてるのか分からん。

常陸坊　何も考えとりゃせんよあの男――だからしゃべらんのだ。

しょうもん坊　しゃべれんのだ。

常陸坊　お前が言えた義理か、何だあの様は。

蝶がぼんやりとはいってくる

忠信　蝶、どうした……

蝶は首を振る

常陸坊　おい――考えた事があるか、一体俺達は何処からやってきたのか、ここへこの笹りんどうの旗の下へ。

しょうもん坊　何処からってまさか、海の中から海坊主みたいにずぶ濡れになってやって来たわけじゃあるめえ。

常陸坊　そうだ、しょうもん坊、たまにはお前、いい事を言う。例えば俺達は海からやって来た。

しょうもん坊　まさか……

常陸坊　いいや、そうなんだ。俺達は何もない海、つまり、何もかも失い尽くしたところからやってきた。

継信　そして源氏の御曹司の下に集まった……

楓　わたしたちは違うよ、わたしたち女は――

常陸坊　どう違う？

楓　わたし達はまるで、何かを失うためにこの軍団にやって来たような気がする……

しょうもん坊　何かって何だ！一体そんな大切なものを持っていたのか……

楓　男とは違うよ……何かになりたいとか、何かに野心を持ったり、自分が変わりたいなんて思っていなかった・……・

梢　そうよ、貧しくてもいい、古里にいてたまたま出会った男を思い切り愛し、心底憎んで涙流して……その日その日を生きて行く……やがて子供を生む――育てる。

楓　そうここは、この軍団には少しばかりの自由がある、女だからって差別されたりはしない――戦のために女は必要なんだ、必要なんだでも―

蝶　魔がさしたの……ちょっとした心の隙間に――結局何のカンのって、わたしたちは遊女じゃない。

忠信　――蝶……

蝶　引き裂けっていってるの源氏の御曹司は、身一つを二つでも、三つにでも

引き裂いてみせろってわたし達に――でも許してあげる、光ってるもの、あの方の目…光ってる――だから…（何かが堪えきれない）

常陸坊　そうだ、俺達ももっと輝かなければならん、キラキラと眩しいばかりの軍団になって、おごれる平家の世をぶっつぶすんだ！

俺達はしがみつく土地も、系図もその他の何物ももっちゃあいないんだから――

継信　そうだ、いたずらに迷うことはない。あの鵯越えの圧倒的な強さをただ信じる事だ、あの方の力を信じる事だ――

蝶　……死にたい、死にたいよ早く……

忠信　おい！どうしたっていうんだ――（一同もぎょっとする）

蝶　もう疲れた……休みたい。こんなもんじゃない、いつかきっといい暮らしが出来るって、ずっとずっと思い続けてた、鼻ったらしのこんな小娘の頃から……甘い事言って、色んな男が近寄ってきた。くれてやったよ、欲しけりゃどうぞこんな躯でよかったらって、でももう駄目――嘘だけじゃ、夢だけじゃ疲れるばかりで遣り切れない――嘘や夢しかくれないものね男って・……・休みたい、本当にもう誰か、大きな神か仏か、そういうものに言ってほしい「もういい、いいんだ蝶、休んでいい」って……言ってほしい…・

音楽　暗転

第五場

人物――影法師、頼朝、梶原、政子、蛍、郷、義経、海尊、忠信、伊勢、杉目、蝶、しょうもん坊、片岡、楓、梢　。

影法師　一の谷の合戦からほぼ一年が過ぎた。この一年は義経にとって長い時間だった。鎌倉にある兄頼朝の腹の裡が読めない。

何故に義経はあれ程の戦績をあげながら冷遇されるのか――

元来が義経短気である。確かにこの男、静かに次なる作戦を練って想いにふけるなどは及びもつかない、似合わない。

ハイエナのように血の匂いをかぎつけ、相手の弱みに付け込み襲いかかる。

そんな時にだけこの男は光った。

場所変わって鎌倉。

灯りつくと鎌倉、頼朝と梶原二人。

頼朝　それは取り巻きだけの問題ではあるまい。

梶原　確かに取り巻きは、烏合（うごう）の衆です。ああいう者どもが、京で大手を振っていたのでは、坂東武者いいえ源氏そのものの品性を疑われます。殿の血を分け

た弟君故、わたしもがまんしておりますが、しかし九郎殿の昨今は、目にあまる振る舞い。

頼朝　言ってみろ、例えばどんな――――

梶原　しかし……

頼朝　かまわん、言え。

梶原　天に二つの日輪なし・・・・と。

頼朝　九郎がそんな事を？

梶原　間違いありません、この耳で聞き、目で確かめたことです。

頼朝　（薄く笑う）九郎め、何を血迷っている。この頼朝を無視するどころか、命でも狙おうと言うのか。

梶原　それに…

頼朝　……・どうした。

梶原　九郎殿は先日院から従五位下（じゅごいのげ）、太夫尉（たゆうのじょう）を賜りました――――

頼朝　何だと！出鱈目を言うな。

梶原　いいえ間違いありません。

頼朝　ならばなぜそれを早く言わん！

梶原　・……・申し訳ありません。

頼朝　あの後白河のタヌキ奴、腹の狸が見え透くぞ、義経に官位を与え、やがて骨抜きにするこんたんだ。

梶原　それにしても九郎殿は、公家の衣で牛車に乗って院に参内（さんだい）しております。

頼朝　それ以上聞きたくない！九郎は気がふれたのか――――一体自分が何者になったつもりだ、貴族にでもなった気でいるのか――それならばこっちにも考えがある。この頼朝の代官の地位を義経から剥奪（はくだつ）する――――すぐ使者を使わし申しのべろ、好きにしろ、公家にでも何にでもなれ、この頼朝と縁を切ると云えるんだ――――もういい下がれ！

梶原　はッ（下下がる）

入れ替わって北条政子入ってくる。

政子　また声を荒立て、どうなさったのです。

頼朝　政子か、義経の事よ。

政子　義経が何か不始末でも。

頼朝　馬鹿な男だ・……・戦に強いだけで、自らを装うことだけに狂奔しているゲスな弟だ――――何も何一つ分かっていない。仮に平家との戦に勝った暁にこの国に何を造るのかが見えていない。この国を統一し、体制を一本にし、新たな法秩序を造り上げるため、この俺がどれ程骨をおっているかが、分かってはいない。

政子　それは無理でしょう。

頼朝　無理かもしれん、しかし腹違いとはいえ、血を分けた弟ではないか、だからこそ情けない。

政子　壮大な夢を、夢だけで終わらさないためには、不用なものは捨てるのです。夢を現実にしていく為には、一切の情は無用です。

頼朝　分かっている、しかし……

政子　いっそのこと、義経に妻を娶(めと)らせたら……

頼朝　何だと？

政子　あなたの息のかかっている者の娘――例えば河越太郎重頼の娘郷などはどうでしょう。

頼朝　しかし、そんなことをしてどうする。

政子　どうするといって（笑う）まあ、それから先の事は、監視させるなり、骨抜きにさせるなり、そこはそれいかようにも……

頼朝　だが、義経も源氏の直系、河越の娘では格が――

政子　いいえ、断じてそんな事はありません。己れの置かれている立場を、格を知らせなければなりません。義経には河越の娘ぐらいが丁度お似合いというもの（笑う――更に笑う）

頼朝は辟易(へきえき)として、ただただ政子の狂ったような笑いを眺めるのみ。梶原景時が陰で聞いていた。頼朝、政子の灯り消える。

――梶原景時の部屋――

蛍がいる。彼女は今、ストッキングをはいている。傍らに梶原景時が上半身裸で寝そべっている。

梶原　兄も兄なら弟も弟さ。まるで冬の山火事みたいにカッとくる。カッと燃えたらちょっとやそっとじゃおさまらない――家柄が血筋かそんなことはどうでも侍はここよ（ト自分の頭を叩いて）ここがどれだけ冷えてるかっていう事が肝心さ、なあ蛍。

蛍　さあ、どうかしら。

梶原　それにしても何故だ。

蛍　何が。

梶原　何故義経を怨む。

蛍　怨んでなんかいない。

梶原　怨みもないのに何故義経の失脚を望む。

蛍　あんたはそういう人よ。怨みがあるから義経を滅ぼそうとする。だからこそ私の話に乗った。でも私はあんたとは違うわ。

梶原　だから何故だ。

蛍　私はただ

梶原　ただ何だ。

蛍　赤とんぼ食べたことある？

梶原　いいや、イナゴならな、しかし突然何を――

蛍　彼岸になると小さな赤とんぼ、背中に亡くなった人の魂乗せてそっと運んで来る、まるで空埋め尽くすように――

梶原　それがどうした。

蛍　だから赤とんぼだけは殺しちゃいけない。でも子供の頃、羽むしって頭取って食べちゃった。知ってたけど食べちゃった。

梶原　それで？

蛍　死んだ人の魂食べちゃった人間は地獄しか行けない。

梶原　おい！

蛍　ひもじかったからね。他に食べるものなかったもの……義経滅ぼすわ私。

梶原　だから何故だ――

蛍　あんたには言えない。

梶原　何故？

蛍　何故何故で生きていけたら幸せよ。

梶原　不思議な女だ……おい（卜蛍の手を取る）

蛍　（手を握り払って）他の女にしなさいよ。喜んであんたの何故に答えてくれるのだって、中にはいるからさ――あッ流れ星（空を見上げていた）

梶原　おい蛍！

音楽　暗転

義経の住む堀川の館。河越の娘郷と、離れた位置にいる義経に光当たる。

郷　なぜですか？

義経　訳は聞かずに、このまま帰っていただきたい。

郷　親元を離れ、はるばる京までまいりました。

義経　こうしてお願いしている。今なら戻れる。戻ってほしい。

郷　わけを教えて下さい。

義経　わけは言えない。

郷　この私が嫌いですか？

義経　そんなことはない。

郷　ならば何故？

義経　言えないと言ったろう。

郷　私に死ねとおっしゃるのですか。

義経　何故だ、何故そんな事を！

郷　私帰れません、帰れないんです。

義経　意地か、あなたの意地がそう言わせているのか。

郷　いいえ、私はあなたの所へ嫁いで来たのではないから。

義経　何？どういう事だ

郷　政子様からのきついお達しです。あなたの考えている事を逐一報告せよと。

義経　まさか。

郷　出鱈目を言って私に何の得がありますか。

義経　……信じられん、こんな事が兄や兄嫁のする事か――しかし――

何故喋ってしまった。

郷　それは多分……いいえ、訳は言えません――置いてくださいますか

ここに。

義経　あゝ、帰ることはない。帰れなければ帰る事はない――お前をここへ嫁

がせるため、両親は鎌倉から何をもらった。

郷　止めてください。

義経　土地か、それとも地位か、何でもいい。誰にだって欲しいものはある。喉

がしびれる程、欲しくてたまらぬものが、そのために人は時としてかけが

えのないものを売る。

昔自らの躯を売って、我が子の命を助けた女がいた。そのことがいつまで

も許せない子供がいた。

まして己自信の利欲のために売られた娘は生涯その親を許せまい――

帰れなければ死ねばよい――

郷　えッ？

義経　いや、いつか、どこかで時が来たらこの俺とともに死ねばよい。

郷　……

義経　怨みをたよりに、それだけで自らの生き方を決めてしまう者も居る。それ

が狭いか、狭い程いい、人の心は。ただその奥底に火が燃えさかってさえ

居れば。

郷　九郎様……

義経と郷の灯り消える。変わって鎌倉。

椅子に腰掛けている頼朝と政子、傍らに梶原

頼朝　どいつもこいつも呆れた弟達だ。範頼は山陽道で干乾(ひぼし)にあったイモリのようにいつまでもへばりついて、平家追討どころか、先へ進む事も出来ない――義経は京の都で、公家気取りの毎日か、このままでは源氏の自滅もそう遠い事ではない――

梶原　何分平家と違って、吾々は舟の戦を苦手としています。

頼朝　そんな事は分かっている。いつも得意の戦が出来るわけではない――しかし平家と接触すら出来ずもう何ヶ月が過ぎていると思う。食糧を送れ送れの催促だけで、戦については何の知らせもない、何か工夫はないのか。

政子　こういう戦は正攻法ではきっと無理なのでしょう、そんな気がします。

頼朝　それで？

政子　いっそあの男にやらせてみたら。

頼朝　あの男？

政子　そう、あのごろつきどもの大将にです。

頼朝　義経か――

政子　うってつけの仕事でしょう

梶原　しかし果たして今更、義経殿が乗り出して打開できましょうか、この状況を。

頼朝　分からん、しかしお前よりはましだろう。

梶原　はッ？

政子　それに万一、悪い目が出て全滅したとしても、あの男ならこちらは何の損失もないんですから。

頼朝　政子そこまで言う事はないだろう。例えどうであろうと義経も俺の弟に違いない。

政子　おや、気に障りましたか、麗しい兄弟愛もけっこうですが、あなたは源氏の棟梁、いいえ源氏ばかりではなくこの国を治めねばならない人です。もっと物事を冷静に判断していただきたいもの。

頼朝　わかったくどく言うな。景時、京へ使いを出せ。九郎に平家追討ちを任る。そして行け、お前も行って必ず平家を全滅させろ。

何もかも……始まりはそれからだ――

梶原　はッ――

ＳＥ――早駆けの馬一騎、京を目指す。義経一人光の中。

義経　待っていた・・・・この知らせを一日千秋の思いで待っていたのだ！

全員、戦闘の用意をして集まれ！

敵は屋島だ、此れより舟で阿波に渡る。

鬨の声、駆け抜ける馬のひずめの音、波の音。空を引き裂いて放つ矢の音入り混じる。

やがて音楽。

中央奥に佐藤継信の亡骸を男達が頭上に捧げて来て降らす。

義経　佐藤三郎兵衛継信――見事であった。見事な身代わりであった。勝ったとはいえ、この戦お前の働きなくしてこの勝利はあり得なかった。必ずその武名末代まで伝わるだろう。心安らかに眠ってくれ（ト拝む）

女達が進み出て、一輪ずつ花をささげる。

義経　（式終わって切り替わって）さあ皆、今夜は存分に骨を休めてくれ、戦はまだ終わった訳ではない。充分に英気を養って、明日からの戦に備えてほしい（ト言い置いて去る）

それぞれに腰掛ける侍達、傷の手当をする者もいる。酒を飲む者もいる。浜辺である。

常陸坊　切り替えが早いな、気持ちの切り替えが、俺なぞはあゝ早くはいかん。

涙の乾く間もなく今夜は骨休めだと来る。どう思う忠信。

忠信　兄は立派な影武者だった。そのことを思うと躯が震える。

常陸坊　勿論お前の兄は見事な死にざまだった。だが俺が言っているのはあの方の変わり身の早さについてだ。

忠信　今はそれどころではない。

伊勢　もっともだ、海尊、忠信にそんなことを聞くのは酷だ。

常陸坊　そうかもしれん。しかし俺はあの人の血が冷たいのではないかと思う時がある、伊勢どう思う。

伊勢　俺はそんなことは考えない。あの方は戦の神なのではないかと思う。三日もかかる海の路を、あの暴風雨をついて半日たらずで渡る。

そして、たった七十騎の軍勢を焼き討ちと大音響で、千にも二千にも見せ掛ける。そればかりか、二度とあるまいと考えていた平家の虚を突いて屋島の背後から攻め込む。

今後あの人がどれだけ大きくなるか、俺には見当もつかん。

常陸坊　確かに盗賊上がりのお前が言うからには、戦は天才だ。

伊勢　昔の事は言うなって言ったろう海尊。元が何だろうと今はれっきとした源氏の侍――お前にしのごのいわせねえぞ！

常陸坊　分かった分かった。気を荒立てるな、俺はただ・・・・・・

杉目　ただ何だ。

常陸坊　人の情けということに。

杉目　情けがどうした。情けで戦に勝てるか、情けで人の世渡れるのか。

常陸坊　ほう杉目――お前いつからそんなに利口な口をきけるようになった、いつからまるであの方のような振る舞いをするようになった。それも修行の内か――

杉目　海尊！

常陸坊　さしずめお前もあんな所だ（と継信の死体を指して）「よくやった。後世に名をなすだろう。皆休んでよし」――これで一巻の終わりだよ。

杉目　許さねえ！抜け！（ト刀振りかぶる）

忠信　止めろ杉目！（ト忠信が止める）

杉目　いいや、今の言葉、聞き捨て出来ない。

忠信　止めてくれ杉目。

杉目　離せ忠信！

常陸坊　来いよ、来いってんだよ。

忠信　兄の霊前だ！止めてくれ――

杉目　（急に力を抜いて）……すまなかった……

常陸坊　日を改めて、いつでも相手してやるぜ！おい酒だ酒だ（ト腰掛ける）

伊勢　信じればいい、これほど強いあの方を信じて従えば、必ず平家は打ち破れる。

楓　そうよ、伊勢三郎の言う通りよ。

常陸坊　俺は何もあの方をうたがってるってわけじゃねえんだ・・・・（トぶつぶつ）

蝶　あの方の目光ってる。キラキラ光ってる。それでいい、それだけで。

しょうもん坊　これは聞いた話だがな、どうも違うらしい。

伊勢　違うって何がだしょうもん坊。

しょうもん坊　いやあ一つ一つが気になってるんだ。

伊勢　何の事だ。

しょうもん坊　まずあの弁慶だ。奴が一度でもいい、軍議で物を言った事があるか？

常陸坊　その事よ。俺も腹が立つ、あいつが何で俺たちの上に立つような顔しなきゃならねえ。しかも重要な作戦を練る時に奴が何か進言したのを見たためしが無い。

伊勢　それは俺も気になっていた。

しょうもん坊　で、仮にだよ、あの方が傀儡（かいらい）だとしたら……

常陸坊　誰の、何の傀儡だ、だれが糸をひく・・・・まさか、そんなとっぴょうしもない（ト笑うが笑いは中途半端に行き場を失う）・・・・・まさか。

伊勢　あの弁慶が、あのくそ坊主が陰で糸を引いているっていうのか――――

しょうもん坊　そうだ、たとえば鵯越の発想から始まって、今度の屋島の作戦全部が、もし、あの方自身のうちから出たのではないとしたら。

伊勢　おい・・・・・

忠信　おい、考えて物を言えよ、弁慶はあの鵯越で直前まであんなにあの作戦を

反対したのではないか。

しょうもん坊　勿論そのことも俺は充分に考えた。だが、あれだって考えたくはないが芝居と言えないこともない。自分で考えだしておいて自分で反対する、その方がむしろ自然だ。

常陸坊　芝居か・…・あながち見当はずれとも言えないかもしれん。

伊勢　そうかもしれん。

常陸坊　つまりあの方の性格を考えてみろ。あの方は、すぐカッと血がのぼる。

伊勢　で？

常陸坊　一見兵法で云うところの奇襲は勘にたよった苦し紛れの発想に思える。しかし一歩下がって考えてみろ！あの鵜越！そしてあの時化（しけ）をついての舟の進軍、そしてこの屋島の奇襲、見事に虚をついている。虚というものが一体、勘だけでこう見事に突けるものだろうか。どうだ、片岡！

片岡　虚とは実のぎりぎりの境にしかない、虚を突くには緻密で冷静な判断がいる。虚とは算術だ――

常陸坊　見ろ！どうだ・…・その算術、あの方のカッとくる性格で見事出来ると思うか八郎！

片岡　それは知らん――そんな詮索に関心はない。詮索は女にまかすがいい、侍は何かに従うことによって自分を生かす！

常陸坊　分かった、お前にはそれ以上聞くまい、だがどうだ皆。

伊勢　弁慶ならあるいは――

しょうもん坊　坊主上りにも色々ある、しかし、奴は冷たい、奴ほど血の冷えた男は知らん。

忠信　そんなことは信じられん、じゃあ、一体、俺達は誰によって動かされ、誰によって命を捨てている！えッ、そんなことは認めないぞ。

伊勢　まだそうと決まったわけじゃない。

忠信　しかし――

杉目　あの方に実体がないとする、だったらあの方はまるで何かの誰かの幻だ、その幻のその又しのび駒は何なんだ、幻に似せるのかこの俺は、己を捨てまで・……・なあ忠信そんな事は、信じ難いぞ！

忠信　そうとも

伊勢　もしそうだとしたら、何もお前等に限ったことではない――だがこれはあくまでも推測だ――仮にの話だ。こんな話に何の信憑性もない。

楓　疲れてんのよ皆――知ってるよ私、皆侍だ、だけど侍だって、裸になりゃあただの男、こわいのよ死ぬのが、震えてんのよ皆、だから誰も邪推深くなってんのよ。

常陸坊　そうかもしれん、死ぬための戦だ、そんなに死ぬことは恐れてはいない、しかし、今度の戦は神経戦だ、しらっとして、ないでしまった波間に扇の的が出てき、それを与一が射たり、こういう戦はイライラする、確かにこたえる。楓の言うことも一理ある。

しょうもん坊　それにつけても弁慶よ、あいつの目はゾッとする、明るいものを

見ようとはしない何も、何一つ――

梢　嫉妬だしょうもん坊、あんたにはあれだけの才能がない。

しょうもん坊　何だお前。

梢　だってそうじゃないか、あいつにまとわりつく人の噂を聞いてみな、皆明るく豪快な話しきゃしないの、その実、あいつは狭い暗い所で、いつだって額にシワをよせて考え込んでる、ねえ、あの男、一体女知ってるのかしら、女と寝たことあるのかな。

しょうもん坊　知らなすぎてもいけないし、知りすぎたとてどうなるもんじゃない。

梢　何？それ

しょうもん坊　いいや、人よ中庸（ちゅうよう）を行けか――難しいのう。

伊勢　古来、優れた武将には必ず優れた参謀がいる、それは参謀が秀でているから名将が生まれるのか、名将が参謀を生み出すのか、定かではない。しかし、ある面でこの二者は一体だ。そう考えればいい。

片岡　伊勢の云う通りだ。

常陸坊　あのくそ坊主を俺達の参謀格と認めるのか。俺にゃあ、そんなことは出来んぞ。

片岡　だったら……・

常陸坊　だったら。

片岡　自分の力と才能で奪え！

常陸坊　ほう、武士は力か、武士は美ではなかったのかな。

片岡　時の流れを読むことだ。華美なだけではこの乱世侍とはいえぬ。既に力の時代に変わっている。

常陸坊　ならばなぜ、あの方は自分の弓にこだわった。命を賭してまで平家の矢ぶすまの中へ、どうでもいいようなあの弓を拾いに進んだ、義経の持つ弓がこんな名もない弓なのかと平家に笑われない為に命がけであの弓を拾った。あの方は自分の命より名を惜しんだ――あれは時代への逆行ではないのか

片岡　お前にはわからん――

杉目一人光の中に残る。

杉目　武蔵坊弁慶――そうはさせるか、次第次第にこの俺を削り取り、実体をなきくし、やがて残るのは虚、或は幻――

そうはさせないぞ義経――

俺は最後まで……最後？

俺の最後とは、その時、俺は最早俺ではない……

だとしたら、だとしたら……

音楽　暗転

［休憩　随意に］

第六場

影法師　元暦二年二月屋島に於(お)いて義経の軍団に破られた平家は更に西へ敗走した。
同年三月二十四日ついに平知盛以下平家は、義経軍によって一門滅亡する。
遂に宿敵の平家を打倒した義経にとって次なる目標とは何か――
年若くして頂を極めてしまった者は常に虚しい。
その虚しさの向こうに義経の明日は果たしてあるのか……・
さて、いよいよ杉目小太郎行信が義経になるための舞台稽古――
ヨーイスタート（とカチンコを鳴らす）

義経の住む堀川の館。弁慶が椅子に座って演出している。忠信直立して叫んでいる
周囲を取り囲む人々。

忠信　年来の宿望をとげんとせし他、他事なし――（忠信と交替する杉目）

杉目　思いもかけぬことです。骨肉の情よりもかの梶原の讒言(ざんげん)によりて・……・
よって、かような、このような悲しみの極致に果てしなくたたずみ遥か
鎌倉をあおぎて……あおいで。

弁慶　一体何を言いたい。

杉目　だから、頼朝殿に義経公が――――いや間違えた、兄頼朝に、この私義経が

何としても逢いたいと。

弁慶　分かるか皆えッ？

一同　（一斉に首を振る）

弁慶　見ろ！皆分からないと言ってる。かような悲しみの極致に果てしなく佇み、遥か鎌倉を仰ぎて――分かるわけないだろう。そんな和歌の出来損ないのような言い方で――いいか、設定をもう一度頭に入れろ、設定を！

ここは何処なんだ。

杉目　腰越の浜辺の岸壁です。波の音がして・……・

弁慶　そうだ、すると鎌倉までは約一里、そのたった一里を、遥か鎌倉を仰ぎて等というのは、修辞が過ぎるんだ。

美辞麗句だけで頼朝公のかたくなになった心を開けると思うのか。

生活を語れ、己れの生活史を心情の奥底から揺さぶるように相手に伝えるんだ。

杉目　だから私は――

弁慶　私？その私とは誰を指した言葉だ。義経という他の人格に為るために、とっくに捨てたんだろう杉目小太郎行信などという私は。

杉目　はい――

弁慶　はいは余計なんだ、あの方は、この弁慶に「はい」等と答えない。

杉目　どうすりゃいいんだ！

弁慶　そうだ、その方がまだいい。カッと来て、この弁慶に、どうすりゃいいん

だ！とどなりつける。その方がよっぽど御曹司らしい。

いいか、自信にあふれとるんだ。一の谷、屋島、壇ノ浦と進撃につぐ進撃で平家を滅亡に落としこんだあの方は、例えばいま、ぎりぎりまで張りつめた弓のつるだ。

その張りつめた気持ちが、ここ腰越へ来て、大きな山にぶつかる。

山は押せども引けどもビクともしない。それが頼朝公だ。

杉目　分かります――いや、わかるぞ！

弁慶　おい、しょうもん坊、お前頼朝公になれ。

しょうもん坊　私が……まさか。

弁慶　まさかじゃない、杉目の相手をして頼朝公になれといってるんだ。

しょうもん坊　私は頼朝公なんて、そんな……

弁慶　だから仮にだ。

しょうもん坊　仮に？

弁慶　今、ここで。

しょうもん坊　ここで？どうやって。

弁慶　ええい、鈍い奴だ。そこへ（トしょうもん坊を引っ張って立たせ）立っとりゃあいいんだ。

杉目、もう一度やれ、この頼朝公に向かって――

杉目　吾、孤児（みなしご）となりて、母の懐中にいだかれ、大和の国宇陀郡（うだのごうり）龍門の牧に赴きしよりこのかた、一日片時も安堵の思いに任

せず甲斐なき命ばかりは存すと雖も、諸国に遊行せしめ、身を在々所々に隠し、返土遠国（へんどおんこく）を栖とし、土民百姓に服仕（ふくじ）せらる。然る幸慶忽ち（こうけいたちまち）にして熟して、平家一族追討の為に上洛せしめ、手合せに木曽義仲を誅戮（ちゅうりく）の後、平家を攻め傾（かたぶ）けん為に、或る時は峨峨（がが）と巌石（がんせき）に向かい、駒に鞭を打ち敵（かたき）の為に命を亡ぼさん事を顧みず。或る時は漫々とある海上に風波の難を凌（しの）ぎ、身を海底に沈めん事を嘆かず、屍を鯨鯢（けいげい）があぎとに曝（さら）す。しかのみならず甲冑（かっちゅう）を枕とし弓前（きゅうぜん）をけしとする本意、併ら（しかしながら）亡魂の憤（いきどお）りを休め奉り、年来の宿望を遂げんとせし他は他事なし。

次第に速度を上げ激しく朗誦（ろうしょう）する杉目の途中より音楽――暗転

丘の上、蝶と忠信、忠信、地に耳を伏せている。

蝶　泣いているの忠信。

忠信　何をいうんだ、ただ……

蝶　ただ？

忠信　思い出していた。

蝶　何を？

忠信　しいッ――聞こえる……

蝶　（耳を土に伏せてみるが）……何も聞こえないわ。

忠信　聞こえるさ……夕方になるといつもこうやって兄さんと風の音を聞いたよ、そいつはきまってゆっくりと、少しずつ、土の下から聞こえてくるんだ・……ほら……

継信、現れる。

継信　（遠くから）忠信、聞こえるか、さやさやと聞こえてくる……あれが母の声だ……うなりだしたぞ、あれだ、あのうなっている風が父の声だ……

忠信　兄さん、聞こえたよ少し、ほんの少し。

継信　忘れるな忠信、忘れちゃいけないんだ、この風の音を。

忠信　忘れるもんか兄さん、耳の中で渦巻いてるよ、踊ってるよ、あのさやさやが母さん、あのごおおごおが父さん――

継信　（調子変わって）言ってみろ忠信。

吾狐子となりて、母の懐中に抱かれ、大和の国宇陀郡、龍門の牧に赴きしより以来（このかた）――

忠信　吾狐子となりて、母の……

継信　もう一回――

忠信　吾狐子となりて、母の……母の……

継信　駄目だ！忘れたのか、あの音だ、夕暮れの大地の底からいつも俺達に呼び掛けていたあの風の音を――

忠信　忘れやしないさ兄さん……でも俺にはうまく出来ない――同じじゃないんだからあの方と――風だよ、風の音でしか聞かなかった、母さんの声は――――

継信　忘れたな、忘れたんだな忠信、あの耳の中がこげつくような夕暮れを――

忠信　忘れやしない――兄さん……兄さん！

継信は消えてしまう

蝶　思い出がある人はいいわね……

忠信　思い出だって？

蝶　先に望みのないものは懐かしむことだって出来やしない――死ぬのが恐いの？

忠信　まさか――闘うために生きてきた、闘いのために死はさけられない――ただ……何か違う――

蝶　違うって？

忠信　よくは分からない、だが、もっと何か、何かが出来そうな気がする。他の何か……

蝶　何が出来るっていうの、これ以上何も出来やしない。戦は終わったのよ摺り減らしただけよ命を、いいえ魂をすりへらしたのよ。
平家は確かに滅んだ。でもその果てに何があったっていうのよ、あなたは兄さんを亡くした――

忠信　お前は何を亡くしたっていうんだ。

蝶　わたし？わたしが亡くしたのは自分よ。たった一つのちっぽけなこのわたしが……もう、何処にもない・……・

忠信　俺の中にもか――

蝶　もう駄目よ忠信――それがもしあなたじゃなくたって……わたしは駄目――

忠信　何故だ？

蝶　人を慈しむためには、どんなにちっちゃくても……自分がなくちゃあ・……・

蝶は風に吹かれたように去る。立ちすくむ忠信――暗転。

影法師　さて杉目小太郎行信、義経に扮しての本番、ヨーイスタート（とカチンコ鳴らす）

台の上やや高い所に杉目座っている。

傍らに弁慶、そしてやや離れた所に義経、片岡八郎、常陸坊、伊勢、女達、ここで

は杉目が義経を演じているという設定。

杉目　よし連れて来い――

弁慶　土佐坊をここへ引っ立てろ！

伊勢、しょうもん坊に羽がいじめにされた土佐昌俊が出てくる。

杉目　誰に頼まれて、この館に、いや、この義経に夜討ちをかけた。

土佐坊　誰にも頼まれぬ、俺の、土佐昌俊個人の意志だ。

杉目　嘘をつけ！お前のような下司が、何の理由でこの義経に恨みを持つ、うまく取り入って自分の地位を高める他に俺とかかわる理由などないはず。

土佐坊　首をな、お前の首をぶら下げて鎌倉に志願の土産にする心つもりだった。

杉目　往生ぎわの悪いやろうだ。

弁慶　（横からセキ払いして杉目に合図する）

杉目　往生ぎわの悪い者、いや悪い奴である。

鎌倉の兄頼朝殿の家来であるなら、何故はっきりと自らの立場を主張せぬ、それでも武士か、誇りはあるのか。

土佐坊　どうでもいい、早く首をはねてくれ！

杉目　もう一度聞く、誰にたのまれた。

土佐坊　知らん――

杉目　このう――

弁慶　単調すぎるんだ、一本調子だから、まったく（ト独り言）

杉目　弁慶、何か言ったか。

弁慶　はぁ、その……おい土佐坊、お前の母親はどうした、さぞや自慢であろうなあ、今回の義経公暗殺の仕事、失敗、成功にかかわらず、頼朝公より猫のひたい程の土地をもらったお前の母は、ここでお前が見事に首切られても、その土地にすがりついて、息子ようやった、ようやったって涙流しながら、土地耕してのう。

土佐坊　やめろ！そんな話は――

弁慶　めでたいことじゃないか、食うにも困る一人の老婆が息子のあがなった血によってメシだけは食えるんだ。

土佐坊　そういう日常的なことはやめてくれ。

弁慶　日常じゃないぞ、これは形而上学（けいじじょうがく）だ、いいか、目を閉じて思ってみろ、この世に一人残されるお前のお袋の姿だ。

土佐坊　やめてくれ！

弁慶　よし、言ってみろ、一部始終を――

舞台別の所に明かり入って、頼朝、梶原、政子、そして鎌倉の朗党達が居る。そしてその中に蛍も居る。その一隅へ入って行く土佐坊。

頼朝　どうなんだ、誰かいないのか、義経を討って手柄を立てようという者は。

一同　・……・

頼朝　どいつもこいつも腰抜けばかりだ、義経がそんな恐ろしいか、すでに土地もなく、家来といっても、有象無象のゴロツキがわずか、裸同然の義経に何の力がある。

政子　梶原はどうです、適任ではないかと――

頼朝　そうだ、梶原、お前より他にない、どうだ景時――

梶原　はッ、私はかまいませんがどうでしょう、もし仮に、わたしが京に入ったとたん、義経公は警戒をし、堀川の館へ近付くことすら難しいのではないかと――それ程に私と義経公の間は険悪な状態に……

政子　もう結構、どうのこうのと結局は、その気がないのでしょう。

梶原　いいえ決して。

政子　ならば何故。

頼朝　分かった、梶原は成る程、慎重である。

政子　慎重も度がすぎると臆病としか思えなくなります。慎重すぎて身を滅ぼさねばいいが……

土佐坊　失礼ながら、この私に。

頼朝　お前が引き受けるというのか。

土佐坊　はい――この仕事、確かに誰もが尻込みします。なぜなら、義経公を討つという事は、もしかして源氏一門の滅亡につながるのではないかという恐れのがめです。

頼朝　そんな事はない。いつまで同族と血縁ばかりを頼りにしても国を治めきれる……。国を治めるには悪しき血はいらん。新しい才能だけが今は必要なのだ、戦は終わった。しかし肝心なのはこれからだ。いつまでも古い感覚の院や、一握りの公家どもに好きなようにこの国をいじりまわされているのは御免だ。やれ、土佐坊、義経は必要ない！

鎌倉方の明かり消える。

土佐坊、元の位置に戻る。

杉目　必要ないとな！兄が間違いなく。

義経つかつかと土佐坊に近寄り、襟首もって

義経　悪しき血だと……そう云ったのだな。

土佐坊　何だお前は、そのへんの郎党とは口はききたくない。

義経　言ったのか、どうなんだ。

伊勢　やめろ！

義経　えッ、おい（下しめあげる）

土佐坊　（たまりかねて）言った確かに、嘘じゃない。

義経は土佐坊を離す、呆然とたたずむ。

弁慶　（杉目の顔をはさんで義経の方へ向け）見ろ！杉目、義経公は何に対して怒っているかをよく見るんだ――血を分けた兄への実感が分かっていないお前には、義経公がひっかかった言葉は必要かどうかではなく、悪しき血のくだりだ。あの方にとって大切なのは弟への情をどう兄が感じているかなんだ。

杉目　しかし、

弁慶　しかしはない続けろ！

杉目　よし土佐坊、切腹せよ。

片岡　待って下さい――

杉目　何だ八郎。

片岡　こいつは刺客です、切腹は侍だけに許されるもの、こんな奴にはもったいない

杉目　ではどうする。

片岡　どの道この私も似たようなもの、私に任せて下さい。

杉目　よかろう、任せる。

その時、蛍が現れる、片岡、土佐坊に近付く。

土佐坊　待て、しばらくまて――おい。

片岡、無言で近寄り腹を刺す。身体一回転して土佐坊の視界に蛍入る。

土佐坊　うっ――（気付いて指差し）あッ、あの女……ほッ、ほッ…（ほたると言い切れず倒れる）

一同が蛍を見る――蛍冷ややかに土佐坊と片岡を見下ろすのみ

音楽　暗転

第七場

影法師　時移り、人は変わる、いや望んで人は変わるのではなく、河の流れに形を変えてゆく岩のように仕方もなく変わらされるのかも知れない。

あの源九郎判官義経はもう居ない。

赤地錦の直垂（ひたたれ）に赤裾濃（くれないすそご）の大鎧、頭には鍬形白星のかぶと、腰に黄金作りの太刀をはいて、黒馬にまたがったあのまぶしい程の戦略の天才義経は、激しい時の奔流の狭間に飲み込まれてしまったのか、昇る朝日は美しい、沈み行く落日にも詩があり涙はある。

しかし、人は陽の光でもなく、吹き抜ける風でさえない……風ならばやがて行きつく先もあろうものを……

（変わって）何処へ行こうっていうんだ――義経……源義経……

例えば山寺、義経達の隠れ家

義経と静

義経　何か聞こえなかったか。

静　いいえ何も。

義経　誰か呼ばなかったか俺を。

静　いいえ誰も……・

義経　……・眠れない夜に、こう、四本の指で、額から頬、頬から顎、顎から上へ鼻、力を入れてずっとたどるんだ俺の骨を……何もかも、何もかもがそこに行きつく。

静　何？

義経　何だと思う、しゃれこうべだ、せんじつめれば、人はただの一塊（ひとくれ）の骨にすぎない……

静　どうしてそんな……・

義経　さすらう事はかまわない、幼いときから慣れてきた鞍馬山を出て平泉まで、今思うに、あれだってさすらいだ、長い旅だった、雨に打たれれば自分の

身体でそのまま乾かす。

ひもじくて物乞いもした。だが苦しいとも恥ずかしいとも思わなかった、ずっと彼方に標的があったからだ、捨てられた己の命に真っ赤な血をたぎらせるという標的が――はぐれた兄にやがて逢える、やがて時が来る、それまで待つ、待ち続ける、そして……そして鞍馬山で受けた一切の屈辱を返してやる、その為に耐える……だが、今のような待ち方は俺には向いていない――ただ標的もなくただよい、さすらい逃げて行く、落ちのびる…

静　悲しい人ね……何故感じないの、こうしているこの今を見ようとしないの。

義経　今だって？俺には何も見えない、ギシギシと風に鳴る白っちゃけた骨だ、自分の骨しか見えない……

静　思い描いてみたら。

義経　何を……

静　兄殺しをした弟の手にこびりつく血の塊について。

義経　静――

静　一度だってあなたは頼朝公を本気で討つことを考えやしなかった。

義経　いや、考えた、現に練っている、その戦略を。

静　嘘！嘘よ、あなたを滅ぼすのは、あなたの中にある優しさよ、それがあなたを破滅に追いやっているのよ。

義経　優しいって俺が…それは違うぞ、静。

静　足りないのよ憎しみが、足りないのよ、足りないのよ憎しみが！――

私がどれだけ母を怨んでいるかあなたが知ったら……

義経　母？……

静　踊りも唄も私は母に教え込まれた……・もしかしたらそれこそが生きることだと思ってた、でも、それは違ったわ、母にとって、踊りは私を売り込む手段だったのよ、あの人は見事に成功した、だって源氏の御曹司にまんまと売りこめたんだもの。

義経　止めろ……

静　確かに都一の、いいえこの国で第一の私白拍子になった、でもそれは……

義経　静――お前、ひょっとして俺とめぐり逢わなかったらと……そうだろう。

静　いいえ、あなたの愛、でなければ、私はあなたの憎しみの一つよ。

義経　やめろそんな云い方は、黙って聞け、忘れもしない、都にすさまじい嵐が訪れた夜だった、十五才――八回目の桜を見てしまった俺は、鞍馬山を下った、めざすは母の住む平清盛の館――（不意に義経は刃を持ち静の喉元につきつける、この時義経の中では静は常盤となっている）五つ、六つ、七つ、八つ……

風雨激しき音。

奥の空間に刃を持った牛若が常盤の喉元に刃をつきつけている。

牛若　五つ、六つ、七つ、八つ……・桜散るのを八回見ました――私の顔を見

て下さい。

常盤　……

牛若　見るんだ、この顔をしっかりと――何か思い出さないのか。

常盤　（首を振る）いいえ。

牛若　見てくれお願いだ、よくこの私を……・何もないのか、何もないっていうのか。

常盤　（分かって、だが）知りません、どこの盗賊か――何が望みです。

牛若　望みなんかない――ただ……ただ逢いに来た。

常盤　逢いに？この私に……

牛若　分からないのですか、牛若です、牛若なんです。

常盤　さて？何のことやら、私は清盛様の側室です、牛とか牛若とかには知り合いはありません。

牛若　そんな―それはない！そんな――

常盤　帰りなさい、帰るのよ、それとも殺すの、私を。

牛若　そう思い続けた、殺してやろうと――

常盤　何の怨みか知らないけれど、殺したければそうすればいい、さあ・……・

牛若　……

常盤　どうしたの、いくじのない小僧だね。

牛若　何故だ……何故なんだ……

常盤　さあ、一思いにその刃でつらぬいて――

牛若　（刃を振りかざす）

常盤　刺されることで死に絶えるものがあるとすれば、刺されて蘇る想い出もこの世にはあるのです。

牛若　……

義経　ふりかぶった刃の先を俺は自分の足に突き立てた、そうすることによって俺の喉元へこみあげてくる、あの懐かしい呼び掛け、子供が何気なく何回もその母親に言う呼び掛けの言葉を葬った。

同時進行して牛若自らの太腿を刺す。

牛若と常盤の明かり消える、風雨も止む。

義経　その時分かったのさ、俺の敵というものがはっきりと、母常盤を通しての父左頭頼朝の敵がまぎれもなく俺の探していた敵そのものだということが……母は何物も売らなかった、売らなかったからこそ父亡き後、清盛――清盛から他の男へさすらわなければならなかった……・俺には肉親を刺せない、それが母であろうと、兄であろうと……冬になれば、この足の古傷が痛むからだ、なつかしさとそれはもしかしたら・…・もしかしたら……おい――（静が義経の手を取って幻の常盤を刺す）奴だな、あの杉目にお前身だけでなく心を移したな。

静　違う…違うわ――あれは壇ノ浦の合戦が終わった時だった・…・

杉目、杉目（杉目舞台奥に現れる）さぁ返事をしなさい、どうなの、私の頼みを聞けないのお前は。

杉目　出来ません……そんな事は――

静　そう、じゃあ私を愛してはいないのね……・愛もないのにこの私を弄んだ

杉目　いいえ、決してそんな――

静　だったら何故聞けないの、私はお前に頼んでいるのよ。

杉目　あまりにも、それはむごい事だから……

静　酷い？何が酷いの。

杉目　だってそうじゃありませんか、いくら敵とはいえ――

静　お黙りなさい！――――！いい？屍になったあの平家の侍大将の目玉を持って来るのよ、くり抜いて！

杉目　目玉をなくしたら、目玉がなれれば地獄の道は冥すぎて歩けません、たとえ敵の侍といっても、すでに滅びた者を打つ事は――

静　死んでしまえば何もかも同じ！いずれ誰もが土に帰る、土に帰った屍は屍――大切なのは今こうして生きているこの私の愛――

杉目　私にはわたしにはとても・……・

静　小太郎行信、答えを出しなさい、出すのよ答えを――

杉目　お願いです、他のものではいけませんか――せめて、目玉以外の他のものでは。

静　いいえ……目玉でなくちゃあ……

空蒼ざめて、凍えるような三日月の夜、わたし切り取ってもらった目玉をそっとつまんで薄の野原へ出た――目玉こう、口の中に入れて嘗めてみた――あゝ、甘づっぱい香り、舌の上でぬるっとした。あの侍若くりりしいまゝ死んだ、だから目玉うつろじゃない。その目玉指の上に乗せて腰を落として自分のあそこへそっと忍び込ませた……熱い、熱いのよ…

私見られている、躯の中、あの目が侍の目がさし貫く――熱いよう、見てね、見てよわたしのお腹の中、ジンジンする、ジンジンと熱い、熱さに震えたよわたし。私見られてる。見られてる、あゝ……

杉目　　静！

義経

やにわに静に近付いた義経が静の喉元をしめあげていた。

義経　　静！

不意に音楽入り、奥の暗がりで踊りだす蛍。義経気付いて静の喉から手を離す。

蛍の踊りが続く、途中から静嫉妬の炎をくすぶらせ踊りだす。義経と反対側下手に

登場する杉目。郷も踊りに加わる。

互いに憎しみと嫉妬を剥き出した女達の踊りは義経と杉目に向けられている。

激しい挑発の舞の中で凝然（ぎょうぜん）と向き合う義経と杉目。

義経　……蛍……そんな目で見るなこの俺を！見るんじゃない——

蛍　ぼろぼろになるまで見てやる！堕ちて行くのを——義経お前のなれの果てを……

義経　何！（襲いかかろうとする）

踊る蛍。　暗転

第八場

吉野山さびれた祠の前、虫の音、狼の吠え声時折。

片岡八郎が佇んでいる。無念夢想、ややあって蝶がやってくる。

蝶　何考えてるの……

片岡　……

蝶　何見える？

片岡　闇だ……

蝶　闇ってこんなに星がきらめいているのに。

片岡　星の向こうの深い闇だ。

蝶　闇の中に何が見えるの？

片岡　知らん。

蝶　わたし嫌い？

片岡　考えた事がない。

蝶　今考えてよ。

片岡　……

蝶　何故なの……汚れてる私？

片岡　いいや……

蝶　だったらどうして。ね、生まれは何処、何をしてきたの、あなたは何？何なのあなたは……

片岡　……

蝶　あなたは氷……氷で作った刃、あなたは狼、それともあなたは・・・・

片岡　くだらん人殺しだ。

蝶　ひとごろし……もしかしたら飛べるのそれは……泳げるの涯しなく海の底を……わたしは遊女よ、遊ぶのよ男と、あらゆる男と遊ぶ女・・・・

片岡　……（目を見る）

蝶　あなたは何？あなたは誰？

片岡黙って蝶の口を自分の口でふさぐ、抱き合う二人、ややあって蝶、手にした短

剣で片岡を刺そうとする。片岡素早くその腕を取り捻り上げる。

片岡　何の真似だ――

蝶　お願い――殺して（小さく）

片岡　女は殺さない。

蝶　どうして……何故……

片岡　そんなに死にたいか。

蝶　……死にたい……あなたなら確実に殺してくれると思った、だから私

片岡　（蝶に短刀を返して）死にたきゃ勝手に死ね、俺は人助けは嫌いだ。

蝶　救ってくれなんて言ってしない。殺してくれればいいの、ただ黙って…・

片岡　それが人助けだ、誰だって自分を助けるのに精一杯だ。

蝶　どうしたらいい…どうすればいいの私……

片岡　夢をみるからさ。つぶされるとわかっていたら初めから夢など見るな。何かに引き裂かれたくなかったら何も見なければいい。

蝶　出来ない、そんな事。

片岡　えぐってやってもいいんだぜ、目をえぐるだけなら。

蝶　嫌！いやよ。

片岡　痛いのは嫌だが、痛みもなく死ねたらいいか――そんな贅沢にはつき合えない（ト行きかける）

蝶　待って！

片岡足を止める。

蝶　あんた、誰なの、本当に……

片岡　けちな人殺しだ――（ト去る）

蝶　……

狼の遠吠え、虫の音、暗転

静のみ光の中、凩（こがらし）の音。音楽が流れているかも知れない。

静　……伝説って何、何ですか？あなた言いました伝説を造るって……

尾根渡る凩にはがされ、ちぎれ、こぼれ落ちてしまった夢――ここは雪降る吉野山……小さな手のひらに夢のカケラを集めては、フウッと息吹き掛けて、今日一日は暮れました……もう一度たった一度でいいから好きって言えたら、降り積もる雪の褥（しとね）に埋もれてもいい、倒れてもいい、死んでもいいの……想い出だけを道しるべの旅は、だって本当に悲しすぎるのだもの……伝説ってなんですか（声潜めて）

灯り消える。杉目が静の近くにいた。

静　静に二人がないように二人の義経はいらないわ……

杉目　……

静　何故黙っているの杉目。

杉目　義経が一人でよいのなら、わたしは必要ありません、他の者達のように、これといって特技があるわけでも、ひらめきがあるわけでもないのですから。

静　よくもそんなに自分を蔑(さげすみ)みながら、源義経に似せる為の修行ができるのね。

杉目　それはしかし・・・・・・・

静　鳥肌が立つわ、そんな卑しい男にこの私が肌を許したのだと思うと。

杉目　静！（ト腕を捉えて近寄る）

静　そう、その目よ、憎しみと悪意に満ちたその眼差しが、まるであの頃の義経にそっくり――たった九ヶ月であの人は目の輝きを失くしてしまった。うろたえ、暗闇にたたずみ、痩せこけた自分のまわりをじくじくと呪うことしか出来なくなった。

それに比べて、杉目お前はどう、お前の中に眠っていた獣のような狂暴な血が次第次第に吹き上げ始めた――やさしいものはいやだ、だって弱いもの――小太郎行信、なりなさい義経に、たった一人の本物の義経に――――

（ト杉目に抱き付いていた）

杉目　意味が分かりません。おっしゃる意味が。

静　分かっているはずよ。義経は一人でいい――

杉目　影が光を消すことは出来ません。光あってこその影。

静　だから、だから光を殺し、その光にそっとすべりこめばいい。忍びこめばいい。もう誰も、誰一人あなたを偽物の義経と思う者はないわ。

杉目　私はあの方が嫌いです。忠実な家来ではない。あまりにも苛酷なことをあの方の為に強いられるからです。

ただでさえちっぽけな自分がなくなってしまうから……だからといってあの方は殺せない。もし殺したらその瞬間にこの私も地上から消えてなくなるような気がするのです。それ程、私はあの人に似通った、いや近い所に来てしまったから……

静　わたしはどうなの、もうこれ以上我慢出来ない。

愛せなくなったあの義経を、果てしもなく愛するようなふりをするのは

ごめんよ。

しばらく前より義経が近くで見ていた。

義経　ふりなんかしなくていい――（押し殺した声で）

静　あッ（卜息を飲む）

義経　もうそんな必要はない――山を降りろ、降りるんだたった一人で――

静　違うの。違う……・（卜近寄ろうとするが）

義経　近付くな――俺だってまだ獣のような血があるんだ、そいつが暴れないう

ちに行け――今行けば、いつか時がたてば、お前のことを……お前の舞を思い出す日があるかもしれない。

静　聞いて、お願い。

義経　聞きたくない――

静　お願い……

義経　行け！

静　（静かに）行くわ、降りるわ山を……・でも私一人じゃない。

義経　杉目はお前とは行かない――

静　いいえ違う……わたしもう、一人じゃないの。

義経　（気づく）何？まさか……（いきなり近寄って杉目を倒す）おい！（そして静に向かって）静、言え、誰の子だ！どっちの子なんだ――-（静は黙って首を振る）　言うんだ静！

弁慶が現れている。

弁慶　殿、お止め下さい。

義経　何だ弁慶！余計な口出しは許さん。

弁慶　誇りです。誇り無くして何の源氏ですか、何の棟梁足りえますか！

義経　しかし……

弁慶　自分です、真の大将は時に自らに刃を向けられなくては――

義経　……行け静……確かに、生まれてくる子に二人の父親はいらない……
しかしその事が分かったからといってお前を許す訳には……いやそう
ではない……だが……

静　……義経……わたしの愛した義経……（ひとりごちて）

義経　杉目、送っていけ！足下の確かなところまで――

杉目　（動かない）

義経　送れというのに！（ト手をつかみ静の方へ押しやる）――そのまま消え
てもいいぞ――俺はもう疲れた……

静、深々と下げて歩き出す。杉目もしぶしぶ後を追う。

義経　……これで満足か（ト弁慶に）

弁慶　私のためではない、あなた自身の為です。

義経　だからといって俺が喜ぶとでも思うか！

弁慶　平泉へ辿りつくまでの辛抱です。逃亡者は出来るだけ荷を軽くしなければ。

義経　お前の本心は何処にあるんだ。

弁慶　私にとってあなた以外の者は全て荷物です。
ただ荷なわなければならない荷もあり、捨てるべき荷もあるだけのこと。

義経　分かる――分かった上でしかし……

弁慶　随分昔のことです。ある侍が一人の美しい女に惚れて夢中になったのです。

だがその女は人妻だった。分かっていながら侍は女を自分のものにしようと日夜口説いた……・

女の魔性とでも云うのか、ある日、ついに女はその熱意に負けた。そしてあることに同意したのです。

音楽、回想、袈裟という女現れる。回想の次元に入る弁慶。

弁慶　今夜だな。

袈裟　ええ……

弁慶　よし、間違いなく今夜、お前の屋敷へ行く、行ってお前の夫を殺す、そしたらその時は……

袈裟　あなたの思いのまま……

弁慶　だが何故だ、夫が憎いか。

袈裟　いいえ、誰よりも深く夫を愛しています。

弁慶　では何故だ、何故俺に殺させる。

袈裟　あなたの気持ちを確かめたいから……

弁慶　俺を試すのか袈裟――――

袈裟　そうかもしれない……そうでないかもしれない、でも追い詰められると私は分からなくなるのです。何もかもぼんやりして・……・

弁慶　信じていいのか、お前の気持ちを。

袈裟　いいえ信じてはいけません。この袈裟を信じればあなたは滅びます。

弁慶　滅びるに値する女もいる。それがお前だ――今夜子の刻、うまくごまかして、夫の部屋に一つだけ灯りを点けておけ、それが目印だ――いいな。

袈裟　はい。

風の音、犬の遠吠え。

弁慶　子の刻、侍は、女の屋敷に忍び込んだ、そして抜刀したまま、蝋燭の灯りにゆらゆらと映る一人の男の影を障子越しに貫いた。

袈裟の悲鳴

弁慶　（自ら殺してしまった袈裟を抱き起こし）何故だ……袈裟。

袈裟　（絶え絶えの息の下から）引き裂かれた心は身を引き裂くことによってしか……一つにはならないから……

弁慶　袈裟！

袈裟から離れる弁慶。

弁慶　侍はその場で髪を切り出家したのです……・以来その女の供義を心の中で

し続けているという……

義経　むごい話だ……その女が美しすぎたからか。

弁慶　いいえ、ただそこにその女袈裟が居たから、侍は袈裟と出会ってしまったからにすぎません。

義経　……宿命か……お前だな、その侍のなれの果ては。

弁慶　いいや違う――

義経　そうか、お前ではないのか。

弁慶　違います（下強く）

奥より伊勢三郎がやってくる、ややおいてその他の家来達。

伊勢　僧兵どもがやって来ました！

弁慶　来たか。

義経　何が何でも兄はこの義経の首を取る気だな。

しょうもん坊　あちらの尾根より僧兵が数名――

常陸坊　下から登って来たぞ。

弁慶　正確な数を数えろ。

常陸坊　三十名は下らぬかと。

弁慶　杉目を除いて十一名、ここは戦わずして逃げる他はありません。

義経　だがどうやって？

弁慶　四郎忠信はどこだ！

忠信　はい、ここに。

弁慶　忠信、お前の出番だ。ここは忠信が御曹司の身代わり、忠信に任せる。
われわれは沢を下って何としても落ち延びる。

義経　忠信たのむぞ。

忠信　はい……しかし……

義経　何だ、何か望みがあるか。

忠信　いいえ……わたし一人ですか。

弁慶　勿論だ、一人で充分だろう、そのための稽古をしてきた。

忠信　……

義経　どうした、晴れてその口から源九郎判官義経が名のれる時が来たのだ。
兄継信の遺志をついで立派に務めてくれ。

忠信　恐れながら……わたしには、わたしにはとても……

義経　何！？

弁慶　今更何を——

伊勢　急いで下さい、敵は間近に迫っています。

義経　どういうことだ忠信！おじけづいたのか。

忠信　いやだ……いやです、わたしには出来ない。

しょうもん坊　恥を知れ忠信、今更命惜しいではすまされんぞ。

忠信　止めてくれ……すっ杉目はいないのか、あいつがいい、あいつなら…

弁慶　杉目は今ここにいない。

忠信　しかし何も、俺でなくても。

弁慶　何の為の修行だ、何の為の稽古だ！目を覚ませ忠信。

忠信　許して、許してくれ、お願いだ、たった一人で死ぬのはいやだ、いやだ……恐いよう、恐ろしいんだ……（卜逃げ出す、片岡がすぐ捕まえてしまう）……離せ、離してくれ八郎、頼む。

義経　切り捨てろ片岡！そんな家来を持った、これは俺の恥でもある。

弁慶　待って下さい。おい、そこに縛り付けろ。

常陸坊　やめろ！

義経　何だ海尊。

常陸坊　お願いです。そんなことは止めてください。忠信はきっと一人で立派に——

義経　海尊、今そのことでお前と話しあっている暇はない。やれ弁慶。

弁慶　おい！（卜伊勢達に）

常陸坊　止めてください。お願いです、止めてください！

義経　うるさい！

片岡と伊勢他が祠の扉に何がしかの義経らしき衣装を着せ、忠信を縛り付ける。

忠信　やめてくれ……そんなことはよせ……よさないんだな、この命この命だけは誰のものでもない……親からもらった俺の命だ……なぜだなぜなん

だ……

やや前より杉目がやってきて、その光景を目にしている。

弁慶　行くぞ、皆いいな、これより散って平泉で合流する。

一同　よし！おう！（等押し殺した声で）

常陸坊　忠信……

風の音ひょうひょうと渡る。ひたひたと熊笹を分けて迫りくる敵の気配。忠信の目は既に虚ろである。

忠信　風か……風なんだな……誰もいないのか……誰一人……・

吾狐子となりて、母の懐中に抱かれ、大和の国宇陀郡（うだのごうり）、龍門の牧に赴きしより以来（このかた）……嘘だ！兄さん出来ないよ俺には……義経になんかになれない――（叫ぶ）ものども、ようくきけ、ここにいるは源九郎判官義経とは、真っ赤ないつわり、俺こそは佐藤四郎兵衛忠信――義経の偽首、見事届けよ、あの鎌倉殿に――

誰かが祠の裏手より火を放っていた。火が燃えさかっている。

忠信　あつい……なぜだ……・俺の躯を吹き抜ける風が……風が何故……

燃えさかる火の中、雪が降りはじめていた――

音楽、暗転。

第九場

平泉衣河の河原

人物――影法師、義経、弁慶。

義経　何故棄てた……

影法師　……

義経　佐藤義清（のりきよ）いや西行法師よ、何故武士を棄てて……

影法師　聞いてどうする。魔がさしたとでもいう答えがほしいか。

義経　お前程腕の確かな北面の侍が何故？

影法師　願わくは花の下にて春死なん――その如月の望月の頃。

義経　それはお前の望みか？望みを歌ったのか？

影法師　望みというよりは予言。この衣河を死に場所と――

義経　嘘だ！今は神無月何処に桜が咲いている。出鱈目を言うな。

影法師　真実などどうでもよい。だがあなたは一体どうする。こうやって衣河の河

べりに雪の降り積むまま、永遠にやって来ない春を待ち続けるつもりなのか。

義経　……待つのはくたびれた――もういい、もうどうでもいいと思う。鎌倉の兄はついにわたしを理解しなかった。そのこともいい――この国中に源氏の白旗がひるがえ尽くす日を夢見ていた。歯も生え替わらぬ子供の頃から、見果てぬ夢を追い、まだ見ぬ兄を慕い、そして、そして平家を滅ぼし……半分だ、夢など半分満たされれば充分だ……もういい待つのはいい、俺はこの平泉が気に入っている。もしかしたらこここそ、ふるさとの墳墓の地かもしれない。兄頼朝が討つというなら俺は討たれよう。いや自らこの身を掻き斬って幕をおろしてもいい

影法師　それがかつてない戦略の天才といわれ、一の谷、壇ノ浦、屋島と次々に奇手奇略を持って全戦全勝の義経か源義経なのか。敗者の理屈はいつも一見美しい、しかし負け犬は所詮くずだ。くずの滅びるに何の美学か――

義経　何とでも言え。ここまで追いこめられ、僅かばかりの兵で鎌倉へ攻め上がり兄の首でも打ちとれというのか！

影法師　何の為に影を育てた。

義経　生き延びる？生き延びてどうする。

影法師　涯しなく行け義経、山があれば登り、崖ならば駆ける降りる。さらに海あれば海を渡ってなお進む。それこそが源九郎義経の戦略、この戦略に退却

という文字はないはず――

義経　海の向こうは遠く蝦夷（えぞ）――更に、更にその陸の彼方の海の先は・・・・

影法師　もし何もなかったとしても、義経は進むだろう。そしてその何もない不毛の地にまず笹りんどうの旗を立てるのだ……・

義経　……何もない荒野に笹りんどうの旗をか……・西行、いや佐藤義清　―おしい男だ、武士さえ捨てさえしなかったら、とてつもない平家の総大将になれたよお前は――売れ！売ってもいいんだぞこの俺を――鎌倉の兄に、そのつもりだったんだろう初めから――

影法師　義経！お前何故……

義経　分かるさそのくらい。お前が鎌倉方の間者つまり影だってことぐらい。出来るだろうお前なら、満開の桜の下で眠るような大往生を見事にやってのけるだろう。

いやな奴だ、自分の死にざままで歌にしてしまう奴なんてのはな、本当の話いやな奴だよ……（と言いつつ去る）

吹雪の音つのる。凝然（こぜん）と立ち尽くす影法師。

影法師　……

弁慶　法師。

影法師　誰だ？

弁慶　俺だ武蔵坊弁慶だ。

影法師　お前――――

弁慶　自分を捨て去ってしまったからこそ影――影に迷いがあってはならない。
売れ、義経公を鎌倉へ、迷いなく恐れずに。

影法師　弁慶、お前？……しかし何が望みだ。

弁慶　義経を生かし、杉目を影として生かす。そしてその先に俺が作り上げるのは歴史だ！伝説だ。この世に限りなく残り残りつづけるものだ。

影法師　しかし――――！

弁慶　行け鎌倉へ西行――それでも歌は、お前の歌は残るだろう、後の世に――

――

影法師　弁慶！お前――

暗転

第十場

再びあのさびれた平泉の館に場所は帰って来た。

十数名の男女が床に、寝台に、まるで屍のように寝転んでいる。

夜明けに近い、第一場からつづいた朝方、義経と郷、やや離れた空間に二人。

義経　やがて夜が明ける……郷、なぜこんなみちのくの果てまでついて来た。

郷　一緒に死のうとおっしゃったではありませんか。

義経　その言葉を信じたのか。

郷　いいえ、言葉を信じたのでもあなたを信じたのでもありません、ただ…

義経　ただ何だ……

郷　私は伝説の義経という方を知りません、私が知っているのは爛熟（らんじゅく）し、燃さかり、まさに亡びかけていたあなたです。

義経　人の滅ぶ様がそれ程面白いか。

郷　面白いだなんていや――私はただ美しいと……

義経　美しい……

郷　分かって下さい、ただ見ていたわけではありません……私も又燃え落ちる火の粉の中で狂ったのです。

義経　それは分かっている――人は変わる。

昔の俺ならそんなことを云うお前を許さなかったろう、滅びたくて滅ぶわけではない……お前は俺に何も望まなかった、静は俺に俺以外の何かを望んだ……

郷　他の女の話はやめて――

義経　しかしあの女には帰り道があった、郷お前には帰り道もない、いいのかそれで……

郷　初めから私に帰り道などなかった……

義経　そうか……しかしもう既に行き止まりだ、今日こそは必ず藤原泰衡（ふじわらやすひら）の

軍勢がここへ攻め込んで来る。

郷　滅ぶのが美しいといっても血の通わなくなった屍のあなたを見るのはいや

——覚悟は出来ています。

殺してあなたの手で……

義経　郷——

郷　……いいの分かっています、きっとあなたの行く先、私は足手まとい

——それが出来るなら、生き直して下さいもう一度。

義経　知っていたのか……しかし……

郷　黙って……しゃべってはいや……目をつぶって……

義経は目を閉じる。郷は静かに着ているものを脱ぐ。

郷　いいわ……忘れないでお願い……

義経　郷！……

義経静かに手を取りやがて激しく抱く

暗転

白装束の郷のなきがらをかかえて立っている義経。

弁慶と片岡入って来る。

弁慶　……

義経　何も言うな弁慶、郷を手厚く葬ってやってくれ。

弁慶　はい――――

二人は郷を運ぶ、凝然と立ちすくんでいる義経。

ふるえながら背に差していた刀を手に取り、自らの喉元につきつけようとする。

刀は血にまみれている。義経にとっては長い時間が過ぎる。

片岡八郎が背後から忍び寄る。瞬間刀を取り上げる片岡。

義経　何故邪魔をする。

片岡　あなたが失敗するからです。

義経　失敗？刺しそこなうというのか。

片岡　そうです。

義経　八郎！お前この俺を――――

弁慶戻ってくる。

弁慶　どうしました。

義経　何でもない、何でもないんだ！（下去る）

弁慶血ぬれの刀を拾いあげる、弁慶一瞬見る。片岡無表情。灯りは消える。

明かり全体に入る。蛍目を覚ます。杉目座っている。

蛍　眠らなかったの。

杉目　眠れるもんか、これが最後の夜だ。目を開いたまま夢を見ていた。

蛍　どんな夢。

杉目　ずうっと先の夢だ、百年いやもっと先に、俺は必ず生まれ替わる。生まれ替わって、どんなにちっぽけでもいい、どんな貧しい一生でもいい、ただ自分の為だけの生き方をする。

誰かを演じたり、誰か他人の衣装をお仕着せられたり、誰かを手本にした生き方はしない。そんな夢を……・

蛍　結局負けたのね。

杉目　負けた？俺が義経に――いいや負けはしない。今日こそ俺は源九郎義経になるのだから――

蛍　負けたのよ、あなたの首は鎌倉の頼朝に見抜かれるわ、偽の首だと。

杉目　見抜かれる？何故だ？

蛍　怨みを多く持った者だけが勝つ。

義経に比べてあなたはただ貧しいだけだった。初めから何もなかったのよ、何一つ。あなたは怨みさえも弁慶や義経から与えられたのよ。

杉目　そんなことはない――それは……・しかし……そんな……

蛍　私梶原景時と寝たわ。

杉目　おい！まさかお前。

蛍　梶原をそそのかしたのは私よ。

杉目　なぜだ……どうして――

蛍　影が形になり、形に光が当たるために――-でも失敗しちゃった・…・

もうやり直しきかないよね兄さん――

杉目　蛍！（ト抱き締める）……連れてくるんじゃなかった・…・ただ当たり前の兄弟でありさえしたら、こんな地獄にまでお前を引きづり込むことはなかったのに……

蛍　いいのよ兄さん嬉しかった私――後悔なんかしていない……・

杉目　いいか蛍――ここから下だ（ト自らの首から下を示し）俺の胴体をお前生き残ってとむらってくれ。どうせ首から上は鎌倉へ差し出さなければならない――出来るかお前。

蛍　一緒に死にたい――

杉目　駄目だ、逃げるんだ！今のうちだ。

蛍　兄さん。

杉目　行け、一旦姿を隠して、又ここへやって来るんだ、頼む、最後の願いだ…

……いつの世にか再び逢うこともある――その時は……

蛍　その時は……

杉目　血の通っていない普通の男と女で、新しい何かを始めるんだ――出来るさ、出来るとも……さあ早く！

蛍　又逢えるね。

杉目　逢えるともきっと……

蛍　いつか……

杉目　ああ、いつか……

蛍は去る。

杉目　……（間）……起きろ！起きるんだ皆、朝が来たんだぜ、俺達の運命の朝が――

一人ずつ起き上がりだす。ここから先は科白はない。科白や歌や踊りによってはとうてい描き尽くせない。何しろ起き上がった全ての者にとって本当に最後の朝なのだから。

壮絶な時間が流れる。軍馬の響き、鬨の声が彼方から迫ってくる。それらの音が本当に間近に来た時までに、舞台に残るのは片岡八郎だけである。あとの者は全て屍となってその身を舞台に晒（さら）している。

勿論、義経と弁慶はここにはいない。

高館の館が突然崩壊する。それはなるべく藤原泰衡の軍勢によってではなく、自然に人為的でなく一気に崩れ去る。

廃墟に片岡がしばしたたずんでいるが、やがて上手へ去る。

下手ではなく上手に彼が去るということは、なおこの男にはしぶとさがある。

そのあとで泰衡の軍勢が、顔をのぞかせるかもしれない。

雨が降り出す。そこここで燃え、くすぶった瓦礫（がれき）が煙を上げる。雨が降る。

エピローグ

断崖の上、吹き上がる風、波の音、一面の雪の遥か下に海。場所は例えば小樽の近く、遠く石狩湾から日本海が眺められる。

義経と弁慶、離れて蛍。

義経　とうとう蝦夷の涯まで来てしまった…これが地のはてか――

弁慶　この海を舟で渡ります。そして彼の地に再び笹りんどうの旗を……

義経　もういい弁慶……いいんだ……

弁慶　何の為にあの平泉から五年……こんな最果てまでやって来たのですか。

義経　それはそのままお前に聞きたい――

弁慶　やり直すためです。生命あるかぎり、何度も生き直すためです。

義経　あまりにも多くの血が流れすぎた。あまりにも無惨だった……

弁慶　その犠牲を無駄にしないためにも。

義経　これから先、何処へ行こうと、どう生きようと、その犠牲が償えるわけではない……

弁慶　鎌倉殿への怨み……

義経　もう兄を怨んではいない……何もかもが過ぎ去った事だ……（蛍に）蛍――何故ここまでついて来た？

蛍　……（黙って小さな白い布を広げて何やら白茶けた骨を海に落とす）

骨のかけらが、風に舞い落ちて行く。

義経　何だ――（ト蛍の撒く骨を見て）

蛍　骨よ、あの人の……

義経呆然とする

弁慶　杉目の……

蛍　（以外と明るい顔で頷く）

重い雪が降り始めていて、骨は雪に混じって定かではなくなる。

義経　見ろ！あのずっと先を。

弁慶　あの海の先は韃靼（だったん）、涯しなく大きな陸があると聞きます。

義経　違う！見えないか、あの海を尾羽うちからした蛍の群れが飛んでいる。

青白いかすかな光を放ちながら……

あれこそ失われ傷付いた源氏の魂だ――

継信……忠信……そして静……郷……杉目、あの蛍の群れが

……見えるか弁慶。

弁慶　いいえ……しかし……

義経　舟を用意しろ！あの光頼りに、陸を目指す。たとえそこに何も何一つないとしても――

雪降りつのる。不意に幾億の蛍が尾を光らすのが見える――風烈しく、波高く、蛍――蛍という女がうっすらと笑った。

音楽、あのワグナーがあって一切は闇に閉ざされる。

了（おわり）